

---

# 魔法少女リリカルなのはStrikerS ~煌きの幻想~

鐘

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikerS ～煌きの幻想～

### 【Zコード】

N3142M

### 【作者名】

鐘

### 【あらすじ】

事故によって死んでしまった少年神童焰真。神様の気分からとある世界に転生する・・・その世界はリリなの世界だった・・・。文才の無い作者が原作崩壊キャラ崩壊有りのダメダメ駄文ファンタジーこういうのが苦手な人は  
回れ右をお願いします><出来る限り頑張ろうと思います。よくあるチート系物語ですがよろしくお願いします。

## キャラクター紹介（前書き）

主人公&デバイス達の紹介です。  
神童焰真 カオス エデン の紹介  
主人公達チート系です。w

## キャラクター紹介

### 主人公&デバイス紹介

神童焰真 17歳 184cm 58kg A型

髪の毛の色 黄色 瞳の色 紅色

魔力変換資質 炎熱・電気・凍結

魔導師ランク EX

ミッド式 ベルカ式どちらでも無い変わった魔法使用可能  
ミッド式&ベルカ式も使用可能

バリアジャケット

黒い服に黒いズボンとにかく黒

FF8のスコール・レオンハートと同じ感じのデザイン

好きなもの 自然 武具 旨い料理 アニメや漫画  
苦手なもの 計算 辞書 など

転生前と転生後で歳に変化無し

普段からはあまり人と話さず一人で居ることが多い

転生前に武術を少しやっていて運動神経は良い

頭も悪くは無い、デバイスは二つ持っている

能力 「神技創造」自分想像した武器・技・魔法・召喚魔法使用可能

「幻想能力」転移・鍊金術・空間移動・など使用可能

「超変身」想像した物や生命体に変身可能

### 力オス

神童焰真のデバイス 携帯時黒いピアス

人のような意思を持つていて（礼儀知らずな性格）

多数の武器の変形可能である

黒刀「罪」

日本刀が黒くなつたような刀切れ味は良く名刀とも呼べる一振り

光剣「破」

光の大剣横にも少し長く光の剣を伸ばすことも可能

焰刀「断」

赤き刀身の双刀 刀身を触ると熱い

魔槍「滅」

黒い槍 見た目はドラゴンクエストのメタルギングの槍

エデンと同じ焰真のデバイス敬語や礼儀知らずのデバイス  
カートリッジの装填方法

無限発装填のリボルバータイプ

## エデン

神童焰真のデバイス 携帯時は白いブレスレット  
人のような意思を持つ（礼儀正しく優しいタイプ）

モードがいくつかある

モード ドラグーン

初期状態のモード一番よく使用されている

二つの銃を持ち5枚のドラグーンウイングと言つなの羽のような物  
がある

見た目はストライクフリーダムガンダムのような感じ

モード アルテマ

一撃の攻撃に力を使うモード

大きな3枚の天使の羽に砲撃用の銃

モード エデン

最強の状態 ドラグーンの見た目で両肩に砲撃用の砲台があり  
ミーティアのようなのも装備している

カオスと同じ焰真のデバイス 礼儀を心掛けている  
カートリッジの装填方法  
無限式オートマティックのマガジンタイプ

## キャラクター紹介（後書き）

作者「このキャラで頑張ります」

焰真「よろしく・・・」

作者「原作崩壊やキャラ崩壊有りですが・・・よろしくです」

作者「キャラのしゃべり方や性格とか違つともあります・・・」

作者「次回から本編ですので・・・よろしくです 三・三・三」

## 一話 転生後と出会い（前書き）

事故で死んでしまった神童焰真

神様の気まぐれである世界に飛ばされてしまつ・・・  
デバイス二つを託され神様からのお願い」とをやり遂げるべく

転生された世界で頑張ることを誓うのだった・・

第一話なので長くしてみました・・・自分的に・・・

## 一話 転生後と出会い

俺は事故で死んだ……信号無視の車に衝突し死んでしまった普通なら……そのまま地獄やら天国に行くはずだったのだが……

真っ白な世界に神様と名乗る奴が現れて……

「君に二つのデバイスと言う物を渡す……転生だ……頑張つてくれ」

「転生?」

「君に拒否権は無い……君に凄い力も託した頑張つてくれ!」

と言られて今……森の中に俺は居る

(マスター転生完了です現在状況に問題ありません)

(ここは……どこだ?)

(しらねえよ)

(エデン場所分かるか?)

俺のデバイスと言う奴のカオスとエデン。エデンはいい子なのだがカオスは

あまり良い子とは言えない……

(エジはとあるアニメの世界っぽいです……前見てください)

エデンに言われ前を見ると……見たことのあるロボットが破壊されていくのが見える

(まさか……ガジェット!?)リリなのか!)

（マスターは知つてゐるよつですね・・・）

「行つて見るか・・・・・」

ガジェットと女人が戦つてゐる場所へ向かつた・・・

「アクセルシユーター！・・・」

ガジェットが破壊されている・・・・数多くの魔力の弾？を操つて  
ぶつけて破壊してゐるのか・・・

（マスター やろうぜ！ やろうぜ！・・・）

（・・・少しだけやつてみるか）

「カオス行くぞ・・・・・」

（了解！・・・）

カオスが言つと黒い服と黒いジーパンみたいな感じの服装になつ  
た・・・

（戦闘の仕方は転生した瞬間にマスターの頭の中に入つてゐます）  
(便利なことだな・・・・)

「黒刀・・・罪」

長い一本の黒い刀 FF7のセフィロスの使用してゐる刀の黒い  
バージョンみたい

「断罪！」

「えつ！？」

大量の黒い斬撃がガジェットを襲い次々に大破していく。

「調子はいい感じだな・・・死罪！！」

シューン！

一瞬でガジェットの背後に移動した・・・後

ドゴーン！！

次々のガジェット達は大破していった・・・

(マスター敵は全滅です・・・お疲れ様でした)

ガジェットを全滅させた後白い服の女人がこちらに向かってきました。

「高町なのは一等空尉です・・・よろしければお話を聞かせてくれますか？」

「ああ・・・いいけど」

本物の高町なのは・・・TVの前でした見たこと無かつたけど本物のようだ・・・機動六課・・・もうそこまでか・・・

「お名前を聞かせてくれますか？」

「神童焰真・・・」

「高町空尉さん・・・」

「どこですか？」

(嘘つけ～分かつてぐるぐるにー)  
(カオスは黙つてろ)

なのはは考え込む素振りを見せてこいつ言つた

「貴方は次元漂流者です」  
「漂流者ですか・・・」

と言う感じでこの世のこと時空管理局やいろいろ教えてもらつた  
教えてもらつたはいいけど・・・これからどうすればいいのだろう  
うか・・・

「と言うことで貴方を保護します」  
「保護ですか・・・」  
「はい・・・少し待つてくださいね」

待つていると機械音とともにヘリがやつてきた  
そのへりにのつて移動したのだった・・・

「ティア！この人強いよ！ー！ー！」  
「五月蠅いスバル！ー！」

バシッ！

「うう～ 酷いよティア・・・」

はしゃげすぎるスバルをティアが止めた

「えらい次元漂流者がきてしもつたの～」

「はやて～ こいつどうするんだ？」

「保護するけど・・・あつ！到着したよ！」

ミッドナルダ中央区画

湾岸地区

機動6課

本部隊舎 部隊長室

(マスター囲まれてますよ・・・戦闘準備はどうしますか？)

(いや・・・今はいい・・・)

この部屋には、はやてと彼を保護スタートスズ分隊の隊長のなのはやシヤマルと同じ守護騎士であるシグナム並びにヴィータが神童焰真が来るのを待っていた。

「それにしても、強かつたな・・・ぜひ手合せを願いたいものだ・  
・・・

(バトルマニアの血が騒いでる)

なのはがこいつ睨っていた・・・

すると扉が開きシャマルと神童がやってきた・・・

なのは達の前に来て・・・

「えつと高町なのは一等空尉殿でしたっけ？」  
「はい、そうですよ」

焰真は周囲にいる人達に気を配りながら言った

「神童焰真です・・・漂流者らしいです」

（（（殺氣が出来る（なあ～））））

はやて シグナム なのは がこう感じていた  
焰真は周囲に手を出させないようくに殺氣を放っていた・・・

「シグナムの言うとおり出来る人みたいやわあ～  
「戦つてみたいものだ・・・」

（マスター やるうぜ～いいだろ～  
（ダメだ・・・）

どうしても戦いたいらしいカオスは五月蠅く  
人の話を聞くにも念話が邪魔で聞き取れない・・・

「はじめまして、焰真君、どうやってこの世界に来たんか、覚えて  
ますか？」

「いえ・・・田覚めたら・・・です」

（嘘つけよ～嘘はいけないんだぞ～転生ですだろ～  
（・・・黙らないと・・・）  
（「みんなさー・・・）

力オスを黙らせて次の話に入る

「焰真君、さつきガジェットを倒した武器はデバイスでいいのかな？」

「デバイスって物かどうかは知りませんが・・・判断はそちらに任せます」

ここでデバイスをいつと漂流者がどうか疑われそうなので嘘について判断を向こう側に任せた

そういつとはやては、ここに居る人達機動六課についてなどいろいろ詳しい話をしてくれた・・・少々眠かったがなんとか我慢した焰真・・・危ないな・・・

その後焰真の実力を知りたいらしくシグナムと戦うことになった。

「ここに来て戦闘ばつかになりそうだな・・・  
(やつた〜最高だぜえ！)

ガジェットと戦う予定だつたがシグナムが

「私と戦つてくれ！！」

と、言い出したので・・・6課自慢の訓練施設を使用した模擬

戦が行われようとしていた

「「」やははは～はやてちゃん・・・いーのかな？」

「まあ実力見れるんだから・・・ええやろ新人達もよお～見とき～」

「「「「はいー」」」」

こんな感じで戦闘が開始されようとしていた・・・

「もしかして・・・勧誘するの？」

「まさか～まあ実力が気になるからや～れ～きの戦闘見とくても本気つて感じじやなかつたみたいやし・・・まあ見極めつてやつや」

「や」

シグナムが戦いたくてウズウズしてるので・・・

「シグナムさんは騎士ですか？」

「ああ・・・剣の騎士シグナムだ・・・」

凄い殺氣・・・剣をすでに構えている

「シャーリーデータは頼むで！～」

「はい勿論です！～」

なのはがはやてをジ～ト見つめて・・・

「せや～せやん本当に」とこいつみて・・・

「面白そつだからやーーー」

本音を言つてしまつた・・・  
なのはは飽きたような顔をして戦闘開始を待つていた・・・

皆予想していた・・・  
シグナムを強さは知つてゐる・・・速攻で負けるか  
粘つて負けるかの・・・選択だ・・・

戦闘では1：1焰真も刀を使用していただがシグナム相手に  
接近戦はキツイだろうと考えたのだろうか  
シグナムが勝利すると思っていた

「それでは、ただいまより、機動6課、ライトニング分隊副隊長、  
シグナム二等空尉と、次元漂流者 神童焰真君 両者の模擬戦  
闘訓練を開始します！！

制限時間は45分！

勝利条件は相手を氣絶させる、または戦闘の継続が不可能となつた  
場合とします！！

「開始！！！」

「バッ！！！」

シグナムが剣を構えこちらに向かつて突進スピードは速く  
接近戦で勝負を挑むか・・・

「・・・・・虚閃<sup>セロ</sup>」

「なつ！？」

焰真は指からエネルギー波のようなものを放つた  
シグナムは回避に成功しこのまま突進していく

「カオス・・・やるぞ」

（了解だぜ！）

「ほお～それが貴様のデバイスか・・・」

「黒刀・・・罪・・・」

シグナムは警戒しているのか剣を構えその場で停止している・・・

（くつ・・・なんという殺氣だ・・・）

「いくぞ・・・死罪！」

「なつ！？」

一瞬でシグナムの背後に移動しシグナムはその刹那「がはあ！」  
と言ふ声をあげ・・・焰真から離れた・・・

「先手を取られたか・・・不覚」

シグナムは笑っている・・・中段に構え警戒している・・・

「ふつ・・・いくぞ！」

両者の刃を激突し火花が散っている・・・

シグナムVS焰真を見ているメンバー達は

「凄い・・・シグナムから先手を・・・」

驚きの表所を隠せないフエイト

「エリオ君のソーラクムーブ並の速さだったね！」

と興奮しながら言つキャロ

全員が違い点で驚いてゐる・・・  
シグナムから先手をとり・・・互角以上に戦つてゐる焰真に

はやてが言つ・・・

「まだ二人とも加減しとる・・・本番はここからやで」

力キン！  
キイン！  
ガキン！

両者の刃をぶつかり合つてゐる・・・  
お互い技も出さず斬り合つ・・・焰真が下がり・・・

「準備運動はこの辺で終わりだ・・・  
「ふつ・・・いくぞ！」

「レヴァンティン！」

# カートリッジ、ロード!』

# 『了解！ロードカートリッジ！』

ガシャン！

レヴァンティンを炎が纏い

黒い虚閃を放つたパワーもスピードも上のやつを

二十一

剣と虚閃がぶつかり合い、とてつもない音と衝撃波がでる

「そろそろ決着をつける  
くづ…・・・やるな・・・」

カオス！

# カートリッジロード

(了解！)

ガシャン！ガシャン！

「終わりだ・・・滅罪！！」

焰真がそう言つた刹那シグナムの田の前に現れ通り過ぎていった・・・見える斬撃を残して・・・シグナムが氣づいた時には遅かつた・・・斬撃は爆発し広範囲による爆発が起きた・・・

「信じられません・・・シグナムさんが・・・」

シャーリーは信じられなかつた・・・シグナムが焰真に一撃を与えられず・・・敗北したこと

周囲にいる、なのは達もそう思つてゐるだらう皆驚きの表情を隠しきれていない・・・

「終わつたな・・・」

シグナムを抱きかかえ、なのは達のいる場所へ向かつていった焰真だつた・・・

## 一話 転生後と出会い（後書き）

作者「一話は特別に長くしてみました」

焰真「誤字が・・・誤字が・・・」

作者「確認せねば・・・」

作者「うう～他人の作品に比べると・・・」

焰真「文才無いからしおがない・・・頑張れ」

作者「はい・・・」

作者「それでは皆様からの評価や感想待っています」

作者「駄文ですが・・・次回もよろしくです」

## 一話 民間協力者（前書き）

シグナムに勝利した焰真

その後はやて達に質問攻めをくらつたが  
なんとか抜け出し食堂で空腹を満たしている

## 一話 民間協力者

シグナムに勝つたな／＼強かつたな・・・氣を抜いたら危なかつた  
俺はここからどうすればいいんだろうか・・・

「焰真君ええ／＼か？」

「どうぞ・・・・・」

はやて達がやってきて真剣な表情になり

民間協力者として六課で働く気は無いか？と質問された

「役に立てないかもせんが・・・それで良ければ・・・・・」  
「・・・少しじゃないよ」「

シグナムに勝つてしまつた時点で実力はかなりの者  
リミッターがあるとは言えシグナムに勝利したのだ・・・

「では・・・神童焰真君、機動六課へようこそ！…！」  
「ようこそ、ようしく

民間協力者として働く・

他に行く場所が無い焰真にとつては好都合な話だった

「焰真君のデバイスは・・・一つだけ？」  
「いえ・・・二つです」

俺は皆にデバイスや能力の一部を説明した  
皆は「反則だろ」とか反応はあつたが・・・

「焰真君も訓練参加してねえ  
分かりました・・・」「

時は過ぎ新人達の訓練を見ている・・・  
スバルやエリオが前線・・・ティアナやキャラが後ろか

「皆頑張つてますね・・・」「

「うん・・・皆なのはの訓練によくついてきてるよ」「

噂によればなのはの訓練は凄く凄く！厳しいらしい  
あまり受けたく無いな・・・

「フロイトさんは接近戦のタイプですか？」「

「うーん・・・オールラウンダーって感じかな」

「オールラウンダーですか・・・」「

焰真が考え込んでいると訓練所から

「焰真君～来て～」となのはから指令が出たので向かった

「どうした？・・・」「

「ガジェットを30体ぐらい出すから倒してね

「あ・・・はい」「

けつこうにきなりだつた・・・ガジェット30体が出現したみたいで

戦闘開始の「ホールが出た

「んじゃ・・・Hゲン準備出来てるな・・・

「いつもOKです」

「さつきと違うデバイスだ！」

カオスを使用しているところしか見ていなかつたなのは達はその姿に驚いていた・・・

「モード・・・ドラグーン行くぞ！」

一つの銃に5枚のドラグーンウイング・・・  
その姿はフリーダムのようだ・・・

「ドラグーンファンネル・・・行け！」

背中にある10個もの小さな物体が飛んでいき・・・ピーン！

「ドラグーン！..

「・・・えつ！？」

ファンネルから出たレーザーでガジェット15機が大破された

「いま・・何が起きたの?」

あまりファンネルの存在の気づかなかつたティアナ達が驚く  
残りは15機・・・

「後半分・・・行くぞ!」

焰真は突進していく銃からエネルギー波のようなものを撃ちながら  
ガジェットを次々破壊していく・・・

「すごい・・・」

思わずティアナが吐いてしまつた・・・  
その姿は舞つてゐようで本氣で無いことが見るだけで分かる

「ラスト・・・終わりだ」

「ド、「――」――!」

最後のガジェットもすぐに大破され一瞬の間に30機全滅  
さすがに皆驚きを隠せなかつたようだ・・・

「いやはは～焰真君強過ぎるよ～

「そうですかね?」

そこまで手を入れたわけでは無いけども・・・

訓練も終了し六課で貸し出しされた部屋のベッドで横になっている  
すると・・・「焰真さん居ますか~?」エリオの声だ

「居るぞ・・・」  
「お邪魔しまーす」

「JINの寮は男が少ないらしくエリオが遊びに来た

「焰真さんは・・・なんでそんなに強いんですか?」

強さの秘訣なんて無い・・・神様に貰った能力が強いだけだろう  
と思っている・・・優秀なデバイスもいるし・・・

「僕とストラーダも焰真さんの様になれますかね？」  
「ああ・・・なれるぞ」

そう言うと喜びの表情見せてエリオが「頑張ります！」と言つて部屋を出て行つた・・・・・

(原作通りに進めば・・・強くなるぞ)

（マスターは知つてゐるのですか？）

(まあ～な・・・)

「おひつじー、田田は終了し焰真は深い眠りについたのだった

## 一 話 民間協力者（後書き）

作者「お疲れ様焰真君」

焰真「ああ・・・」

作者「けつこう速いペースで更新してるかな?」

作者「一日一話出来るかな・・・・」

焰真「まあ・・・頑張れ」

作者「頑張りますwそれでは」

作者「皆様からの評価・感想待ってますm・・m」

作者「駄文ですが・・・次回もよろしくですm・・m」

## 三話 拳とスバルとマッハキャリバー（前書き）

新しいデバイスを貰つたらしい4人  
本当ならすぐファーストアラートのはずなのだが・・・  
スバルと模擬戦することになった焰真  
その結果は果たして・・・

## 二話 拳とスバルとマッハキャリバー

スバルとの模擬戦新しいデバイスのマッハキャリバーと共に  
焰真に挑むのであつた・・・

「焰真さんーお願いしますーー！」

「ああ・・・本氣で来いよ」

相手は戦闘機人・・・新デバイスの力を  
ここで見せてもらうか・・・。

「行きますーでやあああーー！」

殴りかかつてくるが・・・振りが大きく  
隙もある・・・

「甘いな・・・はああーー！」

「くつーはああ

スバルのパンチを回避し蹴りを入れるがガードされ  
スバルの蹴りが飛んでくる

「神化の力・・・とくと見よーーはああーー！」

「えつーーきやあああ

焰真の体からもの凄い霸気が飛び出し

吹き飛ばされる・・・焰真は白く赤いロボットのようになつてい  
た・・・

「神化によってその能力は・・・人知を超える・・・これが神化したヤルダバオトだ」  
「ヤルダバオト・・・かつこいい・・・

ヤルダバオト（焰真の超変身で変身したロボット）  
轟級修羅神で操者の生命エネルギーで活動する 自己修復機能もある

操者の動きをそのままトレースすることが出来る格闘戦では一撃必殺の力を持つている

「行くぞ・・・！」

焰真がスバルを殺氣の籠つた目で睨むと・・・「ー?」と言いつ反応を残し  
動けなくなってしまった・・・

「行くぞ！空円脚！でえええ！！！  
「くつ！？きやあああ！」

焰真の放つた回し蹴りから円型の衝撃波が飛び出し  
スバルに直撃した・・・

「く・・・今のは・・・」  
「まだだ・・・行くぞ！」  
「負けてやれない！リボルバー・・・ショートー！」  
「はあああ！？」

スバルのリボルバー・ショートを覇氣で吹き飛ばし  
そのまま接近していく。

「真霸光拳！！」

「つうつー？」

焰真の手から無数の光の弾が飛んでくる  
良い反応でプロテクションを張つたが破壊される

「きやあああ・・・・・はあ・・・・・はあ」

「この程度か？」

「くつーまだだーーはああああ」

スバルはウイングロードを展開して襲い掛かってきたが  
最初より隙も大きく・・・

「そんな隙のある攻撃が・・・・通用すると思つな」

焰真は簡単に回避されスバルの放つ攻撃は次々と回避されていく

「ふんーー！」  
「が・・・・はあ！」

攻撃の隙に蹴りを入れられたスバル  
耐え切れずしゃがみ込む・・・

「勝負ありだな・・・・ふうー」  
「負けました・・・」<sup>（）</sup>ほつ<sup>（）</sup>ほー

勝負が終了したのは達がやつてきた・・・

「焰真君ちょっと・・・・いいかな？」  
「ん？・・・・ああ・・・・」

なのはに呼び出され・・・なのはの元へ向かう

「本気出してなかつたでしょ、本気見たいな」

(マスター、本気出したら機動六課なんて)  
(マスター、どうしますか?)

本気が見たいか・・・誰かと模擬戦でもやるのかな?

「私と模擬戦しない?」

「えつ!?」

魔王と模擬戦?砲撃魔王様とですか?

「今・・・失礼なこと思わなかつた?」

「いや・・・美人と模擬戦は気が引けるなつて  
「び・・・美人つて・・・(／＼／)」

とにかく・・・なのはと模擬戦

スバルのように簡単な戦いに終わりそつに無いな・・・まあやるか

「しようがない・・・やるか」

「手加減無しだからね!!」

「あいよ・・・」

「ううして・・・・・

「行くよ！焰真君！」

「ああ・・・行こう」

高町なのは△S神童焰真の戦いは始まったのである・・・

「行くよ！アクセルシユーター！」

（行くぞ・・・力オス）

（了解！！）

「黒刀・・・罪・・・断罪！・・・

「ドーゴーン！・・・

「さすが焰真君・・・・『デイバイン！』  
「ふつ・・・・蹴散らせ・・・群狼」ロス・ロボス

「バスター！・・・」

( Divine Buster )

「ドーゴーン！・・・

「・・・・・その姿・・・・」

「勝負は・・・これからだ・・・・虚門」

オオカミの毛皮のようなコートをまとったカウボーイを思わせる姿に変わり、左目部分にポインターの様な仮面の名残が形成される。2丁拳銃で戦う。自分の魂を引き裂き分かち合う能力を持つており、狼の弾頭を召喚したり、靈圧の剣を創造する事も可能。狼の弾頭は攻撃を受けると分裂する上、標的に喰らい付くことで大爆発を起します。

「くつプロテクション！」

「まだだ・・・・無限装弾虚門！」

銃から虚閃を連射した・・・・さすがにこれには・・

「くつ！？あやあああ！？」

直撃した様子・・・・耐え切れるか？

「さすが・・・焰真君・・・・でも！？」

「ん？・・・・バインド！？」

のんきに立つてたらバインドされていた・・・

・・・・嫌な予感がする・・・

なのはのとこ・・・・魔力が集中・・・まさか・・・

「行くよ・・・スター ライト・・・」

「やつぱりか！」

「ブレイカアア――！――！」

(Starlight Breaker)

「・・・ATフィールド」

「アーティーンー！」

「やつたかな・・・！」

「危なかつたな・・・今のは・・・」

「にやはは・・・強いな・・・焰真君は・・・」

なのはが落下していった・・・

「大丈夫か！？」

「・・・！？（／／／）」

お姫様抱つこの形になつたが・・・なんとか落下を阻止

「あ、ありがとう焰真君（／／／）」

「まあ・・・気にするな」

（はうう～恥ずかしいけど・・・なんかうれしい・・・）

となのはは思いながら模擬戦は焰真の勝利に終わった・・・

## 二話 桜とスバルとマッハキャリバー（後書き）

作者「なんてやううだ……焰真」

焰真「お前が言つな！虚閃！」

作者「うぎや！？」

焰真「討伐成功か……」

作者「甘いぜ！……」

焰真「そんなテンション高いなら内容考えな

作者「あい……それでは」

作者「皆様からの評価・感想など待つてます」

作者「駄文ですが……次回もよろしくです ま・ま

## 四話 とある機械の戦闘機人（前書き）

なのは達との模擬戦の終了し休憩をしていた焰真ミッド海上にガジェットが出現と言つことで・・・

## 四話 とある機械の戦闘機人

「ガジェットか・・・」

(マスターの言つ原作通りに進んでいない様子ですね)  
(ああ・・・)

ヘルのほうに向かいながら考へていた・・・

「なのはとフュイトか・・・」

「頑張ろつね、焰真」

「ああ・・・・・」

ソラして・・・現在ミッド海上

「断罪・・・」

ドゴーン・・・

三人の活躍でガジェットは次々と大破していく  
数はそこまで多くないのだが・・・

「いつもと動きが違う!?」

「頭良くなつてるよフュイトちゃん・・・」

「でも・・・これくらいならー。」

いつも以上に動きが良く攻撃も激しい  
しかし・・・二人にとつては、まだ大丈夫な領域だ

「双罪！ー！」

刀を二つに増やし斬っていく・・・  
ガジェットもほとんど大破して任務終了だったはずが・・・

「ゼロ・マグナム！ー！」

「つー？プロテクション！ー！」

ドゴオーーーン！ー

突然の攻撃になんとか反応した焰真

攻撃してきた方向を見ると・・・見たこと無い戦闘機人が居た・・・

（ナンバーズ？違う・・・見たこと無い）

（スバルさんと同じタイプの機械のようです・・・）

（早く潰そうぜ！）

「誰だ？お前は・・・？」

「今から死ぬ貴様に言ひ名は無い・・・ゼロ・マグナム

「その程度・・・」

難なく回避に成功・・・相手の武器は小型の銃  
数は一人・・・倒すか・・・

「インビシブル・エア  
風王結界」

「つー？ 武器が・・・消えた？」

幾重にも重なる空気の層が屈折率を変え、その対象を不可視のものとする。

「行くぞ・・・風王鉄槌！」  
ストライク・エア

「くつー？ ジェットショット！」

迫り来る風を相殺出来ず・・・敵に直撃した・・・  
俺を殺すと言うには実力が無いように見えるな・・・

「くつ・・・ゼロ・マグナム！」

「零地点突破・・・初代エティジョン・・・

「なにつー？」

敵の放つた弾は凍つていた・・・

「くそつー！ ゼロ・ブレードー！ ああ  
「全て遠き理想郷」  
アヴァロン

生前失われた聖剣の鞘。エクスカリバーの真の力である「不老不死」の効果を有する。

真名解放を行なうと、数百のパーティに別れ、使用者の周囲に展開される。あらゆる攻撃・交信から対象者を守るこの世最強の守り。それは魔法の領域であり、防御というより「遮断」であるといつ。

攻撃を弾き・・・そして

「とどめだ・・・約束された勝利の剣！」  
（エクスカリバー）

湖の精から授かつた、至上の聖剣。人々の「こうあって欲しい」という願いが形と成った神造兵装であり、星の鍛えた「究極の幻想」。所有者の魔力を光に変換、集束・加速させることで運動量を増大させ、神靈レベルの魔術行使する。

ドゴオ――ン――！

「終わつたか・・・エデン情報は・・いいな」

（OKマスター）

今の戦闘機人のデータはとれた・・・戻つて解析するか・・・それにしても・・・原作には居なかつたな・・・

機動六課 焰真の部屋

「来い・・・霧フクロウVer・V・・・形態変化」

霧フクロウVer・Vはレンズに変化し・・・

（エデン・・・画像を頼む・・・）

（さつきの戦闘機人ですね。）  
（ああ・・・・・）

戦闘機人のデータを見ていた・・・  
後々出てくるナンバーズと変化は特に無く戦闘能力はナンバーズ  
以下

量産型かも知れないが原作には居ないはず・・・

「少し寝るか・・・・・」

焰真は状況を頭で整理しながら・・・深い眠りについた・・・

## 四話 とある機械の戦闘機人（後書き）

作者「原作と違う道に・・・・・」

焰真「おいおい・・・・・」

作者「大丈夫」だつて」

焰真「お前の大丈夫は信用できない・・・・・」

作者「・・・・・○」

焰真「まあ・・・・・気合入れることだ・・・・・」

作者「質問」焰真君の知ってるアニメやゲームは?」

焰真「子供の頃からやつてるからな~いろいろ」

作者「・・・・・最強だね・・・・それでは」

作者「皆様からの評価・感想など待っていますm - - m」

作者「駄文ですが・・・・次回もよろしくですm - - m」

五話 襲撃再び（前書き）

戦闘機人を撃破した焰真

原作には無いことにビックリしながらも  
民間協力者として頑張っている  
平和な時間はあまり無い・・・

## 五話 襲撃再び

何やら話があるらしくフェイトが部屋に来ていた  
戦力が足りないらしく民間協力者だと協力者扱いらしいので  
一時的シグナムをなのはの補佐にして俺をフェイトの補佐にする  
と言つ話だ

「ダメかな……」

「うう……そんな瞳で見られたら……断れないな……」

「正式な補佐になるのか?忙しくなるってことだろ?」

「うん……最近襲撃とか多いから戦力が欲しいらしくて……ダメかな?」

「いや……俺で良ければフェイトの補佐をやるが……」

「本当!?ありがとう!」

喜ぶとこなのか?まあ頑張るしか無さそうだな……  
原作に無い物語……か

「フェイトの美人顔を守るよう頑張るさ  
「び・・美人つて(／＼)」

(ううう真顔で美人つて言うなんて……恥ずかしいけど……う  
れしいかも)

なんてフェイトが顔を赤くしながら考えると……

「そろそろ練習の時間だろ……行くか」

「うん！ よろしくね、焰真！」

「ああ・・・」アリサは、

こうして・・・フェイトの戦闘補佐？副官？まあよく分かんないけど

「うなつたからには市るしか無い……」

練習中

「珍しいな」はやて

「まあ、時間が空いたから見に来ただけや」

はやてが練習を見に来るなんて珍しい・・・まあまだ一週間しか居ないけど

「おい！焰真！模擬戦やるぞ！」  
「・・・あいよ」

いつもながら五月蠅いヴィータさん・・・

「んで誰と戦えばいいんだ？」

「今田の姫君は、わたしが下なんてだ!?」めんどくさいや

勝つた・・・これで模擬戦をしなくても・・・

「焰真、私とやらない？」

「…………もう一回囁いてくれ

「私とやらない?」

「…………フロイトですか!? 嫌だ……めんどくさい……  
ならヴィータと……

「ええ、なフロイトちゃんとやつてみて、な焰真」「  
焰真……テスター口ッサとやるのか?」

シグナムとはやての言葉により断れなくなり……

…………」ひして……

「補佐官の実力見せてね」

「あいよ……」

フロイトと模擬戦することになったのだ……  
場所は晴れ晴れとした海上(焰真の能力で作り出した場所)

「快晴だな……フロイト」

「つー? ……戦闘中に敵に話かけてるの?」

フェイトは自分が馬鹿にされたような表情をして構えている

「違うぞ・・・天気がいいなあ」と言つただけだ

「強者の余裕と言いたいの？・・・なら」「

「・・・乗せられたな・・・」

國語彙圖解

「ハーケンセイバー！！」

「天気が良いのは・・・」「う」とだ!・』

日輪天墜！！

卷之三

空から一つのレーザーのような光ファイトはギリギリ反応してソニックムーヴで回避するが

この中でモナリザが見ながらに分かる

「言葉に怒り突進してくるからチャンスだと思ったがな・・・  
さすが焰真だね・・・」

フェイトも見直したのか警戒した構えでこちらを見ている・・・

# 「プラズマランサー！」

- なり なま なま

一点に向かつて襲い掛かつてきた・・・

焰真はコインを上に指で弾き・・・落ちてきたコインを・・・

「超電磁砲！」  
〔レールガン〕

「なつ！？」

「ドゴーーン！！」

物体に電磁加速を加えて放つ技・・・  
フェイトも予想も出来ずバリアジャケットが一部打ち抜かれている・・・

「今のは・・・凄い技だったね・・・」

「まだまだ・・・」

〔テレポーター〕  
空間移動で一瞬でフェイトの背後に移動し・・・

「なつ！？速い！」

「虚閃・・・」

さすがのフェイトも反応出来ず直撃・・・したが  
まだ・・・戦える様子だ・・・

「今のはビックリしたよ・・・熾真凄いや・・・  
耐え切ったフェイトも凄いがな・・・」

ソニックムーヴも十分速いが空間移動には敵わないかな  
フェイトはバルディツシユを大剣の姿にして構えた

「カオス・・・モード光剣」

カオスのモードを光が伸びる大剣にした・・・

「行くよ・・・はああ！」

「つおおおー！」

ガキイイイイン！！

ガアキイイイイン！

お互いの大剣がぶつかり合っている

「さすがに同じぐらいの大きさだと・・・終わらないな・・・」

「はあ・・・さすがだね焰真」

焰真は大剣を戻し・・・

「スピリット・オブ・ソード！」

とてつもな長いO-Oスピリット・オブ・ソードを出した・・・

「いくぜ・・・はああ

「くつー！」

さすがの長さに隙も多いように見えるが

焰真には隙が見当たらずフェイトも攻撃の機会が無く回避してばかり

「さすが・・・フェイト・・・」

「はあ・・・はあ・・・」

フェイトに疲れが見える・・・決め所だ・・・

「トライデントスマッシュヤーーー！」

「なつ！？砲撃か！」

今の体力で砲撃を放つか……さすがフェイト

「星空間……」

焰真を中心の空間が広がっていく……

「なつ・・・重い！？」

「この空間の中では・・・自由にさせない・・・」

重力も操りフェイトを動けなくしたといひで・・・

「チヨックメイトだ・・・」

黒刀「罪」をフェイトの首に向けて模擬戦終了・・・

「うう～負けちゃった・・・」

「お疲れ様フェイト戻るか・・・」

こうして模擬戦は終了

後からシグナムに私とも！と言われたが断つた・・・

民間協力者からフェイトの補佐か・・・大変になりそうだな・・・

## 五話 襲撃再び（後書き）

作者「どんだけ～アニメや漫画知ってるの？」

焰真「作者と同じ数だけ・・・」

作者「それ言われたらおしまいだ・・・」

作者「まあお疲れ様」

焰真「次回から忙しくなるな・・・」

作者「駄文ですが頑張ります！」

作者「評価をしてくださった方ありがとうございましたー。」

作者「皆様からの評価・感想など待っています＝＝＝」

作者「駄文ですが次回もよろしくです」

## 六話 ファースト・アラート！？（前書き）

フェイドの補佐として働くことになった焰真  
原作で書つファースト・アラート  
ついにこの時が来た  
キヤロの覚醒・新デバイスの力の發揮  
しかし・・・焰真は原作に居ない相手と戦うのであった・・・  
焰真視点がほとんどです ｗｗ

## 六話 ファースト・アラート！？

原作で言うファースト・アラート  
4人となのは達の活躍で成功に終わる・・・キャロの覚醒  
しかし・・・原作に無い数のガジェット達が襲い掛かるのであつた・・・

「こ」の数・・・違うな・・・」

「何が違うの？焰真？」

「いや・・・こっちのことだ・・・先に出るぞ！」

凄い数のガジェット反応を先に察した焰真は先に出撃  
フォアード4人やなのは達も出撃・・・

「つー？」の数・・・生命の樹峻巖！  
セブキヨウケン

光る巨大な樹を作り上げ、周囲の敵を串刺しにする技。貫いた相手の生命力を奪うことも可能。

(こ)の技でも・・・数は減つたが・・・まだか)  
(どうしますか？)  
(地道に減らすか・・・)

ヘキサゴナル・トランスファー・システム  
「六方転晶系」

狙いを定めた六角柱状の空間を丸ごと転送する技  
これで敵をなのは達から遠ざけるが・・・まだ居るか・・・後は  
頼む

焰真は敵を転送させて場所に転移した・・・

「さて・・・楽しい時間の始まりだ・・・」

周囲が寒くなり・・・凍てついてきた・・・

「だいぐれんひょううりんまる  
大紅蓮氷輪丸！」

刀を持つた腕から連なる巨大な翼を持つ西洋風の氷の龍、及び三つの巨大な花のような氷の結晶となる氷と凍氣を自在に発し操る。又、刀以外の部分は全て氷でできている為、たとえ砕かれても水（液体としてその場に無くとも空気中の水分など）さえあれば何度でも再生可能

「ぐんとうしうつらう  
群鳥氷柱！」

ガジェット達に大量の氷柱を飛ばす・・・が数は多く相手も攻撃してこない訳は無く・・・

「まだやるか・・・」

「貴方はここで・・・死んでいただきます  
「なつ！？」

戦闘機人が居た・・・2人・・・  
見た感じ武装はスバル・・・似ている・・・コピーか？

「まだ死ぬわけには・・・いかない」

「行きます・・・はああああ！」

「虚閃！」

虚閃に反応した相手が難なく回避する・・・  
また仕掛けてきた・・・

「てえええええ！」

「ならつ！神刃！」  
カミキリ

焰真の手からエネルギーの刃が伸びた（ビームサーベルみたいな  
の）

「なつ！？がはあ！」

さすがに反応出来ず直撃・・・胸を貫きまだ伸びて行く

「くそつ！リボルバー シュート！-！」

「なにつ？」

スバルの技？こいつは・・・スバルの「コピー」か？  
スバルの技を放つてくる相手だが焰真の見切られて・・・

「ガジェットまとめて潰す！」

カオスをSET・UPさせて光の大剣にして・・・

「見せてやるう・・・奥義つてやつを！」

「なつ！？まとめてだと！？」  
グランドクロス  
聖十字！！」

巨大な光の十字架・・・天に伸びていく光

「終わつたか・・・」

聖十字によつて全滅した・・・

戦闘機人・・・原作に無い物語・・・

「戻るか・・・」

「やつてるな・・・」

皆のところに戻ると終盤になつたところで  
フリードの姿も大きくなつている

「焰真！大丈夫？どこいつてたの？」

「ああ・・・フェイトか・・・敵を残滅してた」

フェイトのほうは終わつたようでこっちに来た

無事終了し・・・ファースト・アラートは終了  
しかし戦闘機人と大量のガジェットのこと・・・  
焰真は残滅跡にいつて・・・確認していた・・・

「ホワイトフーチ風導八卦白蛇」

人の思念を嗅ぎ取ることが出来る白い蛇を作る技。遺留品に残つた思念から持ち主の居場所を特定し、たり、周囲の様子を探るなどの使い道がある。

「なつ！？・・・これは」

ガジエット達の真相

原作に居ない戦闘機人の正体・・・  
焰真は知つてしまつた・・・新たな敵の存在を・・・

## 六話 ファースト・アラート！？（後書き）

作者「今日は短いです」

焰真「更新しろよー！」

作者「うう・・・すいませんm - - m」

焰真「読者の皆様すいませんでしたm - - m」

作者「頑張ります・・・それでは」

作者「皆様からの評価・感想を待つてますm - - m」

作者「次回もよろしくです」

## 七話 模擬戦（前書き）

今日は焰真の嫌いな模擬戦日  
いろんな人と戦わなければいけない・・・  
最初の相手はシグナムだ

## 七話 模擬戦

今回のルール

1時間の戦闘 魔力切れ。『氣絶

「あの時以来だな……焰真、次は負けんぞ！」

「こちらこそ……」

お二人とも、準備はいいですか！？  
それでは……始め！！

「黒刀！ 罪！ 行くぞ！」

「剣の騎士シグナム……参る！」

お互い剣を構え……

ガキイイン！  
キイイン！！  
カキイイイン！！

「さすが……シグナム」

「くつ……さすがだな！ レヴァンティン！ カートリッジ・ロード  
！」

ガシャン！

レバアンティンが炎を纏う

「なら……モード……ダイゼンガー！」

鬼神のような見た目で長い刀を持ちその刀は巨大な大剣になる

「行くぞ！シグナム！はあああ

「ふつ！面白い！」

ガギイイイイ！

ダイゼンガーも持つ参式斬艦刀の一撃をなんとか持ちこたえるシグナム

レヴァンティンにひびが入る・・・

「くつ！重い・・・・・

「止めたか・・・なら・ゼネラルブラスター！」

「砲撃だと！？」

ドゴー――――ン――！

両肩から放たれたゼネラルブラスターがシグナムを直撃  
さすがのシグナムも・・・・・つ！？

「はあ・・・はあ・・・さすがだな・・・レヴァンティン！」

『ボーケンフォーム』

レヴァンティンは剣の形から・・・『の形になつた

「なつ！？離れるか！」

焰真はシグナムから距離をとつた・・・・・が  
シグナムから放たれた矢がとんできた

「負けられない！神技！アスター・シユグリツツ！」

焰真の出した弓から光の矢が数々と飛んでいく

「「オ———ン——！」

「くつ・・・無念・・・」

「サツ！」

シグナムは力尽きたのかその場に倒れる・・・  
焰真は抱きかかえてなのは達の場所へ転移した・・・

「大丈夫か？シグナム？」

「・・・はつ！焰真！なつなにを（／／／）」

「あすまん・・・」

シグナムを降ろした何故かシグナムが残念な表情になつていた  
次の対戦相手は・・・なのはか・・・

「行くよ！焰真君！」

「ああ・・・俺も本気で行くか・・・」

（マスター やるのですか？）

（ああ・・・行くぞ！起動・・・ヴァルキリー）

カオスとエデンが合体して一つのデバイスになった・・・

名前 ヴァルキリー ランクEX LV5（カオス&エデン）LV<sup>4</sup>

見た目は白色と金色の鎧に金色のマント

「動きやすい感じだな・・・」

「・・・まだまだ凄い能力いつぱいだね・・・焰真君は」

「そうでもないさ・・・行くぞ！」

戦闘・・・開始！

「行くよ！ティバイーンバスターー！」

「ヴァルキリー ソード・・・」

剣を出し砲撃を弾き飛ばす

「うそ！けつこう本氣で撃つたのに・・・」

「行くぞ・・・聖<sup>グラ</sup><sub>ンド</sub><sup>クロス</sup>十字！」

光の十字架を放つたが回避された  
さすが・・・魔王この程度じゃダメか・・・

「霸天朱雀！－！」

「エクセリオンバスター－！」

「ドゴオ－－－ン－！」

お互いの衝撃波は相殺された・・・

(マスターどうですか?)

(まあまだ20%ぐらいだな・・・終わらせる)

「もう終わりにする・・・」

「いっただって・・・」

剣を上に上げ剣が十字架の魔力を帯びた・・・

「受けてみろ・・・最終聖十字!――!」

ファイナル・グランドクロス

ピキイ――――ン!

焰真が放つた十字架で・・・訓練所がほとんど消し飛んだ  
威力は抑えたのにな・・・やつてしまつた

「大丈夫か?なのは・・・」

「にやはは・・・もうダメかも・・・」

なのはとの模擬戦も終了・・・今は休憩時間

「ねえ・・・焰真」

「なんだ? フェイト……」

フェイトが悩んだ表情で話しかけてきた

「なんで……そんなに強いの?」

「……たくさん修行したからだ……」

(嘘つけよ~チート!)

(……良い子は黙れ)

(……はい)

「補佐官のほうが強いって……ダメだね私……」

「いいや……フェイトは強いよ……エリオやキヤロの面倒もち  
やんと見てる

戦闘技術だつて、なのはに遅れをとらない……強いよフェイト  
は

フェイトの頭を撫でながら言つ

「ん……ありがとう焰真」

「ああ……これからも頑張ろうな……」

「うん……」

フェイトの悩み話しさ聞いて模擬戦日一田田を終了させた焰真  
新たな力の発動させてとてつもない実力を見せ付ける焰真  
彼の能力には……謎が多い……

## 七話 模擬戦（後書き）

作者「いろんな技使いすぎだ」

焰真「能力だつからな・・・仕方無いさ」

作者「それにしても・・・戦闘多いな」

焰真「お前が決める」とだり・・・

作者「うん・・・」

焰真「はあ・・・」

作者「頑張らなければーそれでは

作者「皆様からの評価・感想待つてます」

作者「駄文ですが・・・次回もよろしくです

## 八話 補佐官のお仕事（前書き）

フェイドの補佐官になつて仕事が増えた・・・  
フェイドの仕事を一部手伝うが・・・フェイドの仕事が多く  
一部が・・・多い・・・今日は朝の練習からだ

## 八話 補佐官のお仕事

「さて・・・たまには俺も動くか」「いつも動いてるのに?」

確かに・・・練習時にはよく動くが・・・自分でもいろいろ試したいことがあるしな・・・

「オリジナルの宝具・・・」

アニメにも出てきていない自分の考えた宝具作成イメージと魔力がもの凄くいる・・・俺の能力が無いと無理だ

「やるか・・・」

焰真は練習場の一部を借りて宝具作成して使用することにした

「イメージは・・・あるさ」

この世界に来てから何個かイメージはしてある  
凄い宝具は凄い魔力・・・

「クリエーター エンド ファンタズム  
創造と終焉の幻想」

「クリエーター エンド ファンタズム  
創造と終焉の幻想」 EX

焰真の状況・状態に合わせて宝具を出してくれる便利な宝具  
宝具に意思は無いが状況に応じてちゃんと出してくれる

(これが・・・宝具ですか?凄い魔力ですね)

(マスターすげえ～ぜ！！)  
(まだ・・・これからだ・・・)

「<sup>バラディン</sup>騎士の誓いの剣！」 <sup>カリバ</sup> A A

銀色の輝く騎士の剣、斬る相手の悪の心が大きければ  
凄いダメージを与えられる剣

「凄いね、焰真ロストロギア反応あるよ・・・」  
「・・・気にするな」

痛いツツコミをされたが・・・そこ気にしたら  
宝具を作成出来ない・・・

「最後だ・・・銀河の破弾！」 <sup>コスモ</sup> <sup>ノヴァ</sup>

空間から放たれる4つの破壊の一撃  
その一つがスター・ライト・ブレイカー並みで反則技

ドゴオ――――ン！！

「焰真・・・また壊したね・・・お仕事増えた」  
「・・・やつてしまつた・・・」

借りた練習場まで破壊してしまった・・・仕事が増えた焰真だった

今はフェイトがロストロギア? だったつけ? そんな感じのやつの危険性を話し合つ会議みたいな感じのに出てるから外でのんびり待つてる最中・・・

「・・・暇だな」

焰真は特に何もすることなく・・・待つのみさすがに暇だが・・・何も無い・・・

「少し・・・寝るか・・・」

焰真の意識は闇に落ちていった・・・

「・・・ん? 枕なんか・・・無かつたよな?」

何か枕のような感触がする・・・  
確か・・・フェイトを待つて・・・寝たよつな・・・

焰真が目を開けると・・・

「おはよー、焰真」

「ああ・・・すまんフフイテ」

フェイトだった・・・会議は終了し一時間も寝てたらしい仕事は大体終わっていたから・・・よかつた

「まだ眠い？」

「ん、寝てるんだけど眠いんだよね・・・」

フェイトの寝てる？4時間程度か？

「何時間寝てる？」

2月3時間ぐらし寝てねよ

俺はため息をつき・・・・座りなおしてアメイの頭を膝に持つて

「なつ? どうしたの? ? 焰真 ( ／＼ ) 「少し寝ろ . . . 仕事は終わってるだろ . . . 「

卷之三

フロイドの頭を撫でてやると諦めたのか  
気持ちよさそうに寝てしまつた・・・・

その後・・・六課の練習場で練習中・・・

「アンロミニアッヂフレイム・ワークス  
無限の剣製」

鍊鉄の固有結界。目視した武器・刀剣を結界内に登録し複製、貯蔵する。固有結界を生成する過程で投影（正確に言えば「心を力タチにする」魔術であり、一般的な投影魔術ではない）を行うことで、結界内に登録した剣や、目指した武具を複製出来る。刀剣に宿る「使い手の経験・記憶」こと複製しているため、初見の武器を複製してある程度扱いこなすことが出来る。

「調子がいい感じだ・・・ん？誰だ！？」

「バレてしまつたか・・・」

「シグナムか？どうした？」

「いや・・・焰真がここに来るのが見せてな、どんな修行をしているか

気になつたから見に来たのだ・・・」

「そうか・・・」

せつかく見に来てくれたんだし・・・

「やるか？」

「いいのかあ！？」

「ああ・・・行くぞ！」

いきなり模擬戦！！スタート！！

ルールは簡単・・・お互の気が済むまで戦うだけ

「レヴァンティン！！

「行くぜ・・・雨燕Ver.V」

焰真の出したリングから青い炎が出てボックスに炎を入れて・・・

「時雨金時・・・形態変化！」

「なつ！？武器が！？」

時雨金時の雨燕が合体して羽のある長刀に変化したのである・・・

「さて・・・行くぞ！」

「面白いな・・・はああああ！」

ガキイイイ！  
力キイイイ！

「さすが烈火の将・・・剣の腕はさすがだな・・・」

「今更だな・・・はああ！」

「時雨蒼燕流 守式・四の型 五風十雨！」

相手の呼吸に合わせて攻撃をかわす技

「なつ！？くつ！レヴァンティン！」

ガシャン！ガシャン！

「紫電一閃！」

「斬刀」「鈍」……零閃！！」

その刹那……「な……にッ！」田にも留まらぬ速さの抜刀術がシグナムを直撃……シグナムはそのまま倒れた……

「また……負けたか」

「ああ……またやろうつな……」

こうして突然模擬戦も終わって  
焰真の一日は終わったのである……

## 八話 補佐官のお仕事（後書き）

作者「お疲れ様です」

焰真「アクセス数も多く・・・皆様ありがとうございます」

作者「これからも・・・よろしくです」

焰真「こっちばっか投稿していいのか？」

作者「なんのことやら・・・」

焰真「まあいいけど・・・」

作者「頑張るもん！・・・それでは」

作者「皆様からの評価・感想待ってます」

作者「駄文ですが、次回もよろしくです」

## 外伝　これが世界か！？（前書き）

いろんな事情で世界サッカーに参加することになった焰真  
フェイトが助けた人が・・・ぜひ！とのことで  
暇つぶしに参加するつもりが・・・大会だったのだ

## 外伝　これが世界か！？

「今日は～なんと！機動六課の聖天使！神童焰真君がチームに参加してるぞ！」

「～～～～～おおおおお～～～～～」

観客から・・・凄い声援だ・・・  
そんな人気者だつたつけ？

ルールも時間も現実世界と似ている  
ただ・・・相手チームに魔法が使えるやつが居るらしい

「焰真君・・・期待してるよ」

「ああ・・・」

チームのキャプテンからの期待されてるが  
サッカー経験など・・・無い・・・

・・・試合・・・開始！！

「始まつたか・・・」

相手チームのボールから・・・さすが世界だ・・・  
初心者が入る世界では無いな・・・

「だが・・・・・

魔法使用可能なら・・・こちらが有利だ

「ボルケーノカット！」

「なつ！？なんだこれ？うわあ！」

炎の壁に邪魔され・・・ボールは俺のところに

「やるか・・・・」

「させない！」

「甘いな・・・ライトニングアクセル！」

もの凄い速さのドリブルで相手を回避して・・・

「いぐぞ！・・・ヒクス・・・カリバー！」

上にジャンプして足を上げ・・・剣が・・・

「いけええ！・・・

相手には止められるわけなく・・・

「ゴール！――――――

以外と簡単に入つてしまつた  
このままやると・・・相手が可哀想だな・・・

「さて・・・適當に・・・なつ！？」

「ブレイクカノン！」

魔力を纏つたシユート・・・出来るのかよ・・・  
魔法使える奴が居るのは・・・本当だつたのか・・・

「手加減無用だな・・・」

現在 前半25分 1:1

「メテオシャワーーー！」

もう手加減なんて・・・してません  
全力で潰す・・・フェイトの前で負けてられん・・・

「流星ブレード▽2ーー！」

さすがに全力でやると点差が開くと思ったが  
相手もなかなかやる・・・さすが世界

「バルガードブレイク！」

「ちつーやられたか・・・」

お互い一歩も譲らぬ戦い・・・  
こんな感じで前半終了・・・3:3だ

「後半も頑張るか・・・」

「焰真・・・」

「ん?ビリした?フェイト?」

選手席にフェイトがやつてきた  
入つていいのか?

「無理しないでね・・・」

「ああ・・・頑張つてくれる」

「うん！頑張つてね！」

「ここまで言つたからには負けられない

後半・・・開始！」

「風神の舞！-！」

相手の守りを抜いて・・・

「ノーザンインパクト！」

シューートを決める！-！

相手も同じような感じの攻めで俺を動かさないようこ  
ボールを上手く回してシューートする4：4

「タイガー・・・ドライブ！-！」

「くそつ！-？」

お互いのゴールキーパーもボールを止めれず  
イライラしている・・・

後半も・・・後わずか・・・ロスタイルム！6：5

「はあ・・・はあ・・・疲れるな・・・

ロスタイルムは一分・・・相手がボールを持っている  
しうじき言つて・・・やばい状況だ・・・

これで決められたら引き分けだが・・・PKは負けるだろ・・・

「とどめだ！ブレイクカノン！！」

相手のショート・・・ゴールキーパーは無理そうだ  
なんとか・・・追いつけるか？

「くそ！負けるわけには・・・後15秒か・・・」

なんとかボールに追いつく  
残りの時間で勝つことは・・・

「騎士の誇り・・・見せてやる！」

相手の放ったショートから・・・先回りして・・・

# 「エクスカリバー！！！！！」

標識のシルエットを複数枚並べて、シルエットの輪郭を強調する。

ズバア――――ン！！

エクスカリバーが相手のショートをやぶり  
ゴールに一直線・・・

「ゴー——ール！！！焰真選手決めた！！！」

「」「」「」「」「」「」「」

凄い声援だ・・・凄く疲れた  
早く戻つて・・・寝るかな・・・  
こうして・・・焰真の世界へのサッカー挑戦は終了し  
さらに・・・有名になつた・・・

### 機動六課・・・焰真の部屋

「疲れた・・・もうダメだ・・・」

寝ようとした時フェイトが入ってきた・・・

「ごめんね焰真・・・せつかくの休日が・・・」

「いいさ・・・いい運動になつたよ」

「ありがと・・・焰真」

何故お礼を言われるのかは・・・まったく分からぬが  
とにかく眠たいな・・・

「寝るの?」

「ああ・・・眠たいからな・・・」

「そつか・・・」

何故かフェイトがベッドに座り

・・・・・膝枕?

「ここの前のお返しだよ・・・・・

「あ・あ・・・・・ありがと」

驚く気力も残っていなかつたので  
そのまま寝てしまつたのだつた・・・・・

後日・・・とてつもない有名になつた焰真は  
いろんなチームから誘われるは・・・・・言つまでもない・・・

外伝　「これが世界か！？」（後書き）

作者「イナズ　イレ　ンー！」

焰真「もうちよい長くしろよー！」

作者「すいません・・・ネタが・・・」

焰真「本編短かったら・・・」

作者「頑張ります・・・」

焰真「はあ～・・・」

作者「頑張ります・・・それではー！」

作者「ご感想ありがとうございました！」

作者「皆様からの評価・感想待つてますm - - m

作者「駄文ですが・・・次回もよろしくですm - - m」

## 九話 事件（前書き）

フェイントと共に街に現れた魔術師を撃退中だが  
何やら・・・嫌な予感・・・

## 九話 事件

現在 魔術師が街で暴れてることで  
フュイトと二人で戦闘中

「逃げ足は・・・速いな」  
「黙れ！フリー・ズボール！」

まあ今強盗？だつたつけ？

魔術師さんと戦闘中・・・弱いな

「一方通行」  
アクセラレータ

運動量、熱量、光などなど  
体表面に触れたあらゆるベクトル（向き）を任意に操作できる  
・・・つまり相手の攻撃を相手に向けてとばすってことかな

「なつ！？俺の攻撃が？」

自分の攻撃をプロテクションで守るが・・・

「もう終わりだ・・・断罪！」

一人目へ撃破・・・

「あ～めんどくさいな・・・」

（マスターA Aの魔力反応！）  
（なに？骨のある奴だな・・・）

俺は反応の場所に向かつた・・・  
そこには・・・

「君が機動六課の聖天使か？」

「天使じゃないな・・・騎士かな？」

「ふつ・・・まあいい・・・死ね」

相手は俺に出会つたその時点で死亡フラグなのにな・・・  
だが・・・そこらへんの雑魚とは違うな・・・

「ヘルインフェルノ！！」

「なつ！？S反応？」

巨大な炎の壁が迫つてくる・・・

「ウォータガ！！」

なんとか相殺・・・強いなこいつ

「強いな・・・だが・・・超電磁砲！」

「バーニングウォール・・・止められないだと？」

「打ちぬけ！――！」

火の壁を打ち抜いたが・・・当たつてないな  
リミッターでもかけてたのか・・・あれでAAは無いな・・・

「ヘルインフェルノ！！」  
「ギラグレイド！――！」

凄まじい炎の激突 空が・・・燃えている  
相手の表情はまだ・・・余裕だな

「やるな・・・甲縛式O・S黒籠！・・・鬼火！」

超密度の炎弾を発射する・・・相手の技はやぶれたが  
相手には当たらない・・・

「ちつ・・・カオス！エテン！決めるぞ！」

(了解・・・リミッター解除します！)  
(能力解除・・・ヴァルキリー・モード完全解除可能)  
(モード・・・ヴァルキリー！)

ピキイーーーン！

（機動六課）

「ロストロギア反応・・・焰真さんからですー..  
「なんやて？」

ビックリだわ・・・ロストロギア反応?  
人間からやと・・・?ありえへんわ・・・

「焰真君・・・あれは・・・あの時のー?」

私と模擬戦したときに出した鎧・・・  
私と戦った時とは・・・全然違う・・・

「凄いです・・・綺麗です・・・」

フォアードの4人もビックリ  
身に纏うオーラが・・・

「どうすんだ? はやて?」

「様子見るわ・・・」

「もう・・・終わりだ」

「くつ・・・・」

「冗談だ・・・俺は弱くは無いが  
奴の魔力値に比べたら・・・さすが聖天使だな・・・機動六課・・・  
・恐ろしいな

「ヘルインフェルノ! !」  
〔グラントクロス  
聖十字! 〕

相殺! ・・・では無く聖十字が勝つた・・・  
元の魔力が違う・・・

「その程度か？」

「くそお！デスマイヤーーー！」

「つまらん・・・炎天鳳凰！」

「巨大な炎を纏つた鳳凰・・・敵の必殺技とやらも  
たいしたこと無かつたな・・・

「どじめだ・・・」

「くそ！ま・・・まだだ！」

「悪あがきか？・・・もう遅いがな・・・

「いいのか？貴様の相棒が・・・どうなつても？」

「なつ！？・・・貴様フェイトに何をした・・・」

「もうそろそろだな・・・」

「機動六課」

「はやてちゃん！フェイトちゃんが捕まつたー！  
「なんやてー？」

フェイトはアラランクの魔術師に敗北  
敵は強い・・・

「焰真君に・・・任せるわ・・・今行つても足手まといや・・・  
「そんな！？行かせてよー！」

「焰真君を信じるんだー。」

～街上～

「貴様ら・・・死んで済むと思つたな！」

「今頃言つても遅いぞ？・・・なつ？」

「見せてやるつ・・・守護転送！」

その瞬間フロイトを抱えた

一人の男が一いつひの転送された・・・

「なに！？・・・！」

「守護転送は自分が守護契約をした者を自分のところに転送する技

だ・・・」

「なつ？だが・・・こいつの命がどうなつてもいいのかな？」

・・・完璧な死亡」フラグを踏んだな・・・

「もつ貴様らに安息の時間は・・・無い」

「なに言つてやがる！？？」

究極の十字架・・・見せてやるつ

「聖なる十字架！その身に刻め！！」

ヴァルキリーの究極砲撃魔法の一つだ・・・

「アルティア・ザ・ナル・グラン・ドクロス  
究極最終聖十字！！」

ピキイーーーーン！・・・

・・・

ドゴオーーーーン！・・・

「フェイト大丈夫か？」

「ん・・・焰真？・・・敵は！？」

「空を見てみろ・・・」

「えつ！？」

雲に巨大な十字架？何kmあるだろう・・・  
空に巨大な十字架が完成していた・・・

「帰るか・・・」

「・・・うん」

「焰真君……少し……ええか？」

「ああ……もう分かってる」

「……コモリッターのことは聞いてへんで  
「すまない……」

機動六課の皆には話していなかつた……  
俺の能力のすべてを……

「焰真……まだ隠す能力があるのか？」

「ああ……シグナム……俺には3つのコモリッターがある」

「「「「3つ……?」」」

フヒイト・なのは・シグナム・はやて  
ここに居る俺以外の皆驚いた……

「1つ目のコモリッター・ヴァルキリー……今日のやつだな

「あれで……一つ目……」

「2つ目のコモリッターは……オーディンだ……」

オーディンの詳しい能力は話さなかつた……

「最後が……ファイナルだ……」

「どれくらいなん? ランクは」

「EXの2倍くらいだな……」

「「「「……え?」」」

簡単に言つと……最強? までは言わないが

強い……

コモリッターのことと詳しく述べ

再度能力のことを話す焰真だった・・・

## 九話 事件（後書き）

作者「能力解除！かつこいいw」

焰真「強すぎるな・・・」

作者「オーディンとファイナルは後々登場しますw」

焰真「何話予定なんだ？」

作者「さあ・・・決めてないw」

焰真「まあ頑張れ・・・」

作者「あい・・・それでは！」

作者「アクセス15000? だつたかな・・・ありがとうございます！」

作者「皆様からの評価・感想待ってますm-m」

作者「駄文ですが・・・次回もよろしくです」

## 十話 憶み（前書き）

フェイトはSランクの相手に負けた  
相性が悪かったから？自分が弱かったから？  
何故なのだろうか・・・

## 十話 憶み

「・・・負けちゃつたな」

SSランクの相手に敗北し焰真に助けてもらつたフェイト  
最近助けてもらつてばかり・・・

「フェイト・・・大丈夫か?」

「焰真・・・ああうん大丈夫だよ」

「・・・そつか」

（マスターかなり病んでますよ・・・たぶん）

（負けたのが悔しいんだろうなつ）

（困つたな・・・）

言葉はいつも通りなのだが・・・  
表情はそうでは無い・・・

「悔しいのか?負けたのが・・・」

「つ!・・・」

「誰にだつて敗北はある・・・俺にだつて」

ここでダメになつては・・・これからどうする?  
原作では・・・まだいろいろと・・・

「違うんだ・・・負けたのは大丈夫・・・」  
「負けたのは?・・・」

敗北は気にしていないのか・・・

なら・・・何を気にしている?

「焰真に迷惑かけてばっかだなあ～って・・・」

「そんなことか・・・」

そつちだつたか・・・困つたものだ

「俺はフェイトの補佐だ・・・助けるのは当然だろ?」

「うん・・・でも、助けてもらつてばかりじや・・・」

「上の者として・・・恥ずかしいと?」

「うん・・・そんな感じかな・・・」

「いや～相当病んでるかな?

気持ちが分からぬわけでもないが・・・

「俺だつて、フェイトに助けてもらつてる、お互い様だろ?」

「焰真はまだ、慣れてないだけ・・・戦闘以外でしょ?」

「でも手伝つてもらつてる、お互い様だ」

言葉が思いつかなかつたから・・・適当に・・・

「まあこれからもお互い様で・・・な?」

フェイトを抱いていた・・・

フェイトの今にでも泣きそう顔を見るのに我慢できずこ・・・

「え、焰真!？・・・ありがと(／＼)」

「これからも、頑張るうな?」

「うん(／＼)」

そう言つてフェイトから離れようとすると・・・

「もつもつ少しだけ・・・ダメ?」

「ん?・・・ああいいけど」

こうしてフェイトも回復し、いつも通りにお仕事に取り組む  
焰真とフェイトだった・・・

（焰真 修行中）

「行くぞ・・・焰刀「断」「断」

普段使用していない、力オスの能力武器  
炎の双刀・・・焰刀「断」「断」

「烈空断斬! !」

田の前にあるビルを斬りつけると・・・上から燃えていった  
技を出しての修行中・・・

「幻想偽夢! !」

「ド「オ——ン——！」

とても」の高じ修行中そのとれ・・・

「焰真・・・・」

「ん? フェイトか? 仕事はいいのか?」

「うん・・・もう大丈夫だよ」

珍しくフェイトがやつてきた・・・

「また珍しい? 何の用事だ?」

「いや、焰真の修行見てたら強くなれるかな~って

「戦つてみるか?」

「え? ・・・うん!」

ひつじて

「行くぞ! フェイト!」  
「うん! ・・・負けない」

「モード GEAR戦士電童！」

手と足に回転するギアを装備し、いろんな動物型のロボを武器にする

焰真がけつじつ氣に入っているロボット

「行くよ・・・ハーケンセイバー！」

「波動龍神脚！！」

手のギアが回転し竜巻を前方に放つた

フュイトの技と見事に相殺

「くつ！閃光雷刃撃！..」

手のギアを回転させ摩擦？つぽい感じで雷の刃で手で放ちながら回転する

「なつ？プラズマスマッシュヤー！」

(Plasma Smasher)

ドゴオーナーン！！

「やるな・・・フュイト」

「プラズマランサー！！ファイヤー！」

「くつ？ゴニローンドリル！..」

そう叫ぶと空間の裂け目が発生し角をドリルにした馬が現れた  
そして手に合体・・・ドリルになつた・・・

「ゴニローンドリルFA！！」  
ファイナルアタック

手のヨニコーンドリルから放たれる相手を貫く竜巻  
フェイトのプラズマランサーを破壊し・・・フェイトを襲う

「くっ・・・」れなら

フェイトは回避に成功するが・・・

「まだだ・・・輝刃ストライカー・喰らえ!」

手に巨大な形の変化したドリルを装備しフェイトの突進  
フェイトはそれを防ぎきれずに・・・

「うう・・・? ?」

「つおおおおおお!・・・」

「ドゴーーーーン!・・・

「はあ・・・はあ・・・はあ

「さすが・・・フェイトだな・・・これで終わりにするか

「真・ソニックフォーム・・・これが私の全力だよ

「そうか・・・フェニックスホール!」

電童に枝のような翼が装備され・・・魔力が見る見る溜まっていき

「はあああああ!・・・」

「速い!・?だが・・・」

ガキイイイン!・!

キイイイン!・!

フェイトの剣と電童の翼がぶつかり合っている  
お互い速いがフェイトには体力があまり無く

「くっ！？」

「終わりだ！フェニックスエール ファイナルアタック FA！！」

翼から放たれる七色の光がフェイトを襲う！

「きやあ！」

「ド、オ――――ン――！」

「ふう～俺の勝ち・・・だな」  
「負けちゃった・・・あはは」  
「まあこれから頑張つて強くなろうな・・・」  
「うん！」

こうして新たな誓いを立てた焰真とフェイト

原作通りに進んでいない世界・・・どうなるのだろうか？

## 十話 憶み（後書き）

作者「いろいろ・・・」めんなさい

焰真「・・・・・」

作者「更新も遅く・・・」んなのフュイトじゃないです

焰真「馬鹿者があああ！」

作者「ぎやあああ！…すいません」

焰真「・・・なんて可哀想な奴だ・・・」

作者「トト・・・ウルウル」

焰真「びひじょひもないな・・・」

作者「うう～ダメダメだけど頑張るもん～それでは

作者「皆様からの評価・感想待つてます」

作者「駄文ですが・・・次回もよろしくです

## 十一話 駆ける一つの閃光（前書き）

原作に出てこない敵

その敵に勝つには今の実力では足りない  
フェイト達は訓練の毎日・・・  
焰真は考えていた・・・

## 十一話 駆ける一つの閃光

「新技・・・ないかなあ～」

(マスター新技とは?)

(フェイト達に、いい新技と教えたが・・・思い浮かばない)

(頑張つてください・・・)

原作に出ない敵は想像以上に実力者だ

今のフェイト達も十分強いが・・・修行が必要だ

「ん? 敵襲か・・・行くか!」

いつもながらのガジェット、数はまあまあ  
あ・・・行くか!

（戦闘中）

「多いな～エーテン～」

(了解SET UP!)

「モード フリー ダム行くぞ!」

二つの銃から放たれるエネルギー弾で次々とガジェットを大破していく焰真

しかし、敵の数は多く、なかなか減らない

「くつ・・・疾風迅雷!」

高速移動して残像を残し、残像からエネルギー弾を放つ技

「多いな・・・阿修羅・解!」

高速で振動するバースト粒子を集合させたオーラを剣のような形にまとめ、振り回して攻撃する技。木すらも蒸発させる程の威力がある。

「うおおおお!..」

ドゴーン!..

ガジェットは阿修羅・解の攻撃に次々大破していく  
しかし、まだ、かなりの数居る・・・

「なら!八尺瓊曲玉!」

ドドドドドドドドドドドド!

無数の光の弾丸を発射する。・かなりのガジェットを大破した・・

（マスター後方より反応です！）  
（いつもの戦闘機人か？）  
（その通りです。）

「神童焰真・・・あなたを殺します」

「いつものセリフだな・・・実力の差が分からぬいか？」

「メタル」

相手の体が銀色に輝いた・・・  
メタル・・・硬そうだな・・・

「神火 不知火！」

両腕から一本の火の槍を飛ばすが回避された・・・

「はあああああ！」

「くつ！？」

相手の蹴りを腕でガードするが・・・硬い！  
鋼か・・・

「ふつ・・・鬼氣“九刀流 阿修羅”」  
「なつ？・・・なんという氣迫だ」  
「行くぞ・・・阿修羅 魔九閃！」  
（まきゅうせん）

「九刀流」状態で激しく回転しながら敵を斬り刻む。

「くうう！？」

回避されたがメタルゴートにいくつか傷をつけることに成功

「鋼再生！！」

「なつ？傷が・・・再生したか・・・」

敵のメタルゴートは元通りに再生したのだ・・・

「再生か・・・ゴニゴーンドリル！」

ゴニゴーンドリルを召喚し上に乗る・・・そして

「行くぞ！・・・騎英の手綱！」

あらゆる乗り物を御する黄金の鞭と手綱。

単体では全く役に立たないが、高い騎乗スキルと強力な乗り物があることで真価を發揮する。制御できる対象は普通の乗り物だけでなく、幻想種であつても、この宝具でいうことを聞かせられるようになる。また、乗ったものの能力を向上させる効果も持つ宝具。

ドゴオーーーーン！！

「やつたか・・・？」

「まあ・・・まだだ・・・」

相手の鋼の腕は吹っ飛んでいた・・・今の突進に耐え切れなかつたのだから

ゴニゴーンドリルを戻し・・・一つの銃を構える

「鋼・・・再生！！」

「つ？腕まで再生か・・・やつかいな相手だ  
行くぞ！！はああああ！」

「くつ！？」

相手の突進を難なく回避する焰真・・・

「パラディン騎士の誓いの剣！」  
カリバー

銀色の輝く騎士の剣・・・相手に斬りかかる

「はあああ！」

「くつ！斬れると思うな！」

バシュ！

相手の腕は吹き飛び・・・もつ一撃斬つたが回避された・・・

「くそ！鋼再生！」

「またか・・・」

「アイアンバースト！-！」

いきなりの砲撃魔法、銀色のディバインバスターだな・・・

「リバースバスター！-！」

焰真が使用出来る数少ないオリ技  
相手の砲撃魔法を反射する技

「なつ！？」

ドーグーーン！

反射してきた自分の砲撃に反応出来ず直撃した・・・

「どうだ？自分の技は？」

一八二·一·

ガキイイン！

相手の攻撃を止めたのは？・・・フェイト！？

「フエイト?」可放  
二二?

「遅いと思つたから来たの……」

すまん……朝一でも再生するから

卷之三

確かに・・・砲撃で終わらせればよかつたのか？  
跡形も無く消し去るような・・・

(「フュイト聞こえるか？」)  
(どうしたの？)  
(「フュイトも来た事だし……ある技を試したいんだ」)  
(え？ いいけど……)

説明中

(つてことだ? いいか?)  
(かなり無茶だけど・・・やつてみるよー。)

「ん？・・・なんか相手の姿が変化してるぞ・・・」

「大きくなってる・・・」

「貴様らが攻撃してこないから・・・もう終わりだ」

アニメのように説明中にもしれないわけ無いか・・・  
世の中甘くないな・・・

「行くぞ！ ドラグーンウイング起動！」

「真・ソニッケフォーム！」

・・・・その刹那

「つー？ 居ない？」

二人の姿は消えた・・・

ズバアーン！！

気配無く・・・突然体に傷がついた・・・巨大化して5mぐらいの姿の鎧の巨人に・・・

ズバアーン！ズバアーン！

「ぐうう！ーくそー」

焰真とフェイトは光速移動しながら攻撃している  
目に見えない速さで動いていて相手も反応できない・・・

ズバアーン！

「くそおおおー！」

腕を振り回しても当たらない……動いても斬られる二人の姿を確認出来ない……

「「ツインバード……」」

二人の姿が見えたが……刹那……消えた

「「ストラアアイク！！」」

ドゴオ――――ン――!

「なつ？馬鹿ば……」

体がバラバラになつていて核が破壊され再生不可能……  
焰真とフュイトの勝利……

「疲れたよ……」

「お疲れ様フェイト……戻るか……」

「今日も疲れた・・・入つていいぞ」

「お、お邪魔します・・・ノックもしないのに・・・」

なんとなく気配でわかつた・・・

フェイトとの技ツインバードストライク・・・

一人でも倒せたが、やはり一人のが楽だ

「焰真～明日のお休み暇？」

「ああ・・・寝る予定だけど・・・」

「いつしょに街に行かない？」

・・・・なんだつてええ～

フェイトと街にですか？・・・荷物持ちな予感がする・・・

まあ行くか・・・

「ああ・・・いいけど」

「やつた～んじゃ明日ね」

フェイトはご機嫌な様子で部屋から出て行つた・・・

「荷物持ち・・・つらいな」

フェイトとの技も決めてフェイトとのお出かけも決定した焰真  
・・・次回フェイトとお出掛け・・・

## 十一話 駆ける一つの閃光（後書き）

作者「いいなあ～いいなあ～」

焰真「五月蠅い！！ぐらえ！」

作者「ガハア！」

焰真「更新もノロノロしようって・・・」

作者「・・・ま～」

焰真「まあいい・・・頑張れ」

作者「あい・・・それでは！」

作者「皆様からの評価・感想待ってますま～」

作者「駄文ですが・・・次回もよろしくです」

外伝2 襲撃！黒騎士（前書き）

更新遅れて・・・すいませんm--m  
宿題やら何やら・・・忙しい><

機動六課の、とある一日

突然敵の襲撃・・・

「今日も忙しいな・・・」

ガジェットでは無い敵反応

黒い騎士？のような感じの敵さんらしい・・・知らないな  
とにかく敵らしい・・・

「ここら辺のはず・・・」

「黒雷突進！！」

「なつ！？」

不意打ち・・・馬に乗った黒い騎士が雷を帯びて  
突進してきた・・・なんとか回避に成功する焰真

「危な・・・お前が黒騎士か？見た目的にそつだな  
・・・空間の歪み・・・消す」

空間の歪み？俺がか？よく分からん」と言つた

「雷帝黒進！」

黒い騎士は再び、焰真に向かつて突進  
見た感じと技的に雷の技を使用していくる・・・

「神羅天征」

斥力を自由自在に操る。全身から放つ、手から放つなど使い方も  
色々。但し連続使用できず、最低5秒間のインターバルを作つてし

まつ。黒騎士は吹き飛ばされた

「つぐう・・・まだだ・・・」

黒い騎士は大きな槍みたいな感じの武器に雷を溜めて・・・

「黒雷爆砲！！」

「力オス・・・黒刀・・・罪・・・無罪！」

黒刀・罪の防御技 無罪で相手の魔力を打ち消した  
無罪は相手の技の魔力を打ち消す・・・この世界では  
凄く強い技

「くつ・・・はああああ！！」

「断罪！」

ドゴオ――――――

捨て身で突進してきた黒騎士に焰真の技が直撃したが・・・

「この鎧は砕けんぞ・・・」

「見た目に合つて硬いな・・・だが！破罪！！」

破罪・・・鋼をも碎く斬撃 威力も大きいが  
隙も大きい技

「隙だらけだ・・・黒雲雷撃！！」

「六幻・・・うおおおおお！」

日本刀のような刀、六幻で雷を防いだ

アクマ用だが……行けるだろ？

「二幻・八花螳？」

目に見えないほどのスピードで相手の懷に入り込み、六幻で8回斬りつける技。攻撃相手にハつの傷跡（放射状）を刻みつける。

「さすがに硬いな……」

「その程度か？黒雷馬！……」

黒い騎士の乗っている馬の形が変化し  
騎士に合体した……さらに硬そうになつた鎧……

「ちつ……・破罪！」

「甘い……・黒雲雷撃！……」

「ドゴオ——ン——！」

見事な相殺……技の威力も上昇し  
防御面でもパワーアップしている

「力オス……モード 瞬刃／風／」

（了解！モード瞬刃／風／）  
(行くぞ！……)

「そんな薄い刀で斬れると思うな……」

「やつてみれば……分かるぞ」

「戯言を……うおおおお……」

「・・・風神一閃」

その刹那・・・

「ガハアアー！我が鎧が！？」

焰真が刀を横に速く振つただけで  
黒騎士の鎧は少し碎けたのだ・・・

「バ、馬鹿な・・・雷帝黒進！！」

「空間六閃！！」

ガキイイイン！！

焰真、素早い抜刀術で黒騎士に六つの傷跡を残した・・・

「な・・・馬鹿な・・・我が鎧が・・・」

「そろそろ・・・チェックメイトだ」

「馬鹿なあああああ！！」

我を忘れ突進してくる黒騎士・・・

「幻想一閃！！」

刹那の抜刀・・・相手に当てていなが斬ることが可能  
魔力や魔術なども斬ることが出来る

「我が・・・敗れる・・・この世の歪みにだと・・・」  
「チェックメイトだ・・・」

黒騎士は真っ一いつになり……砂のようになり  
散つていった……

「機動六課」焰真自率へ

（俺が歪み……分からんな）

（マスターがこの世界に来て何かあつたにでしちうか？）

黒騎士は焰真をこの世の歪みと書つた……  
この世界に転生してきたこと……何があつたんだ？

（殺す前に聞いておくべきだつたな……）

（たぶん話してくれませんよ）

（また敵は多いな……）

「ねえ～焰真！」

「なつ！？フロイトか……どうした、そんな大声で」

「さつきから6回ぐらい呼んでるけど……」

気付かなかつた……

「どうしたの？ 悩み事？」

「いや……大したこと無い」

フェイトには関係の無い話……

歪みは俺だ……迷惑をかけれん……

「大したことのよがな顔してるよ?」

「……」

沈黙……突然フェイトが自分の膝へ焰真引き寄せた

「なつ? フェイト?」

「話してよ……悩み事なら聞くよ?」

「ふつ……フェイトには隠しても無駄だな……」

フェイトは心配そうな顔をして焰真の頭を撫でながら聞いてくる

焰真はフェイトに

黒騎士の言った言葉……やうについて説明した……

（説明中）

「……って事だ」

「焰真が、この世の歪み?なんか難しい話だね」

「俺がこの世の邪魔者みたいな感じかな?」

そんな感じなのかな?黒騎士は俺を倒そつとしてたし……

「焰真は邪魔じやないよ……私を助けてくれるし……いろいろ  
と……」

「・・・あつがとつ、やつまつへれると安心するみ

「うふー。」

焰真はフロイトの言葉と頭を撫でられてこむ感じで安心していた・・・

「少し寝ていいかな?フロイトの膝氣持ち良こからさ・・・  
「おやすみ焰真・・・」

氣分的に甘えたい氣分だったのか・・・  
焰真は・・・すぐに寝てしまった・・・

作者「なんじゅーあの甘い感じはー？」

焰真「お前に言わると・・・ハイハイある

作者「申し訳あつませんでした・・・m - m - m」

焰真「分かれば・・・ようじー」

作者「更新が・・・遅いな・・・」

焰真「分かってるならやれよ・・・」

作者「あい・・・それではー」

作者「皆様からの評価・感想待つてますm - m - m」

作者「駄文ですが・・・次回もよろしくです

## 十一話 騎士の力（前書き）

更新おくれました> <  
宿題も終わってきたのでwこれから更新していきますw  
よろしくですm - - m

約束通り フェイトと外出  
お買い物らしい そして・・・

## 十一話 聖騎士の力

フェイトと街で買い物

午前中は、思つた以上に満足した買い物が出来た  
今フェイトの服を選んでる

「焰真、似合つてるかな？（／＼＼＼）」

「ああ・・・似合つてるぞ・・・似合わない服あるのか？」

「あ、ありがと（／＼＼＼）」

こんな感じで焰真とフェイトは買い物中  
時間も時間なので六課に帰ることにした・・・

「今日は、ありがとなフェイト」

「付き合つてくれて、ありがと焰真」

（マスターもの凄い魔力反応です！）

（六課の皆は気付いてないぜ！）

（魔力反応？敵か？）

（動きが見られません・・・）

（六課の戻つたら行つてみるか？）

「どうしたの？焰真？」

「ああ・・・少し魔力反応あつたから・・・後で調べてみる」

「一人で行くの？」

「一人でも大丈夫みたいだ・・・何かあつたら頼む」

「うん！」

もの凄い魔力反応？・・・黒騎士か？  
空間の歪みを消す者達なのか・・・？

焰真は六課に戻った後・・・反応の場所へ向かつた・・・

「反応はあるがな・・・H[テ]ンー・ドラグーンワイングで探せるか？」

(YESマスター)

「頼む・・・」

焰真が言つとウイングが飛んでいき探しはじめた  
動いてない・・・物？ロストロギアなのか？  
少なくとも原作じやないな・・・

(マスター発見しました)  
(行くか・・・)

焰真は反応の場所へ向かつた・・・そこにあるのは

「指輪？・・・綺麗な指輪だ」

指輪だつた・・・大きな緑色と銀色の石がある・・・  
宝石じやない・・・魔力反応がある・・・

「証を渡せ・・・」

「つー？誰だ・・・証？なんのことやら」

「騎士の証を渡せ・・・貴様には関係無い物だ」

騎士の証？この指輪が？ロストロギアは六課に持つて帰る  
……にしても騎士？証……わからん

「……渡さないのなら……殺す」

そう言つと相手のネックレスが輝きだした……。

「古よりある 大空の霸者 ヴァルイーゼよ  
我に力を……」

ピキイーーーン！

相手の男は呪文？みたいなのを唱えると  
羽のはえた……白く青い騎士みたいな姿になつたのだ

「かつこいいな……それ  
「証を渡す気になつたか？」  
「全然ならん……」

（我が主よ……）

（つ！？誰だ……まさか……指輪か？）

（その通りです……我が主、我が名はグラディウス）  
（我が力……貴方に……）

「……グラディウス？知らないな  
騎士つてことなのか？……やつてみるか

（いけるのか？）  
（行けます……我が主）

「騎士の力か・・・お前は俺の実験台だ・・・」

「・・・殺す」

指輪をはめると・・・頭に文字が浮かんできた

「古より煌く 聖なる騎士 グラディウス

我に力を・・・」

ピィキーーーーン!!

焰真の姿は・・・銀色と金色がバランスよくある鎧に光が伸びる剣 銀色の鏡のような盾の騎士だつた・・・

「貴様・・・まあいい空の槍で貫いてやるが!!」  
「凄い力だ・・・行くか」

（我が主 ここに騎士の能力を送ります）

煌きの聖騎士 グラディウス

武器	聖光剣	グラディウス
盾	白銀の盾	
地上SSS	空SSS	海中S
技	多数	

（なるほど・・・強いな）  
（我が主・・・来ます）

「貫いてやる・・・」

「伸びろ！光の剣！！」

焰真が剣を相手に向けると光の剣が伸びていった

「くつ！まだだあ！天空破貫！」

ドゴオーネン！！

「貴様あ！騎士の力を・・・空弾槍！」

無数の槍が飛んでくる

空中での戦闘重視した騎士か・・・

「集え！剣よ！グラディウスアーツ！」

12本の剣が焰真の周囲に展開され・・・飛んで行く

「数じや負けたか・・・だが

ドゴオーネン！！

「くつ・・・はあああ！！」

「うおおおお！」

ガキイイン！  
力キイイン！

「天空槍雨！終わりだあ！」  
「行くぞ！煌光聖破斬！」

空から落ちてくる槍を巨大な光の剣が斬っていく  
相手は避けきれず・・・

「なに？ ウガアアアア！」

まだ！煌け！我が剣よ！天をも斬り裂く！光の剣！」

（主 チャージ完了）

## （ここ周辺に人の気配は？）

（元）

聖光剣グラディウスの光の剣が空高く伸びていく  
巨大なビルのように・・・

# 「煌きの騎士の奥義・・・その身に刻め！」

「くそ！ 我が敗れることなど！」

「火の馬のラン」

ド「ホー——ン!

「終わつたか・・・」

光の剣を直撃し光になつた騎士・・・

（我が主・・・あの光見えますか？）

(あーーーあれたどーーーだ)

（ああ  
。。  
。。  
）

焰真が剣を振り上げると  
光が鎧の中に入つていった・・・

(相手の騎士を倒すと現れる経験値のようなものです)  
(溜めるとどうなる?)  
(我が真力の解放と主の能力の上昇です)

「戻るか・・・」

こうして六課に戻つて、皆に説明をしたのだが・・・

「・・・シグナム そんな目で見るな

シグナムが輝いた目でこじらを見ている

「・・・言わなくて分かるな? 焰真」「  
・・・俺の選択肢は・・・」

「やあ! 」

2、まあやつてやるわ  
3、しょうがないな・・・

(おこー! 作者ー!)

(「武運をお祈りしてこますミ! ）

「しょうがないな・・・」

「本当か! ？」

「ああ・・・やるわ! 」

「ああーーー! 」

「ねえー フロイトちゃん、どうが勝つと思つ? やつぱり焰真君かな? 」

「うん、シグナムも強いけど・・・実力の差があるからねえ・・・」

「シグナム! 頑張れ! 」

「ヴィータちゃんはシグナムが勝つと思つの? 」

「まあ・・・焰真じゃねえーか? 」

「こんな感じで、どちらが勝利するか予想されてる・・・  
珍しく皆練習休憩しても模擬戦の見学

「先ほどの・・グラディウスで頼むぞ! 」

「ああ・・・分かってる」

(いいか? 短時間で2回もやつて)

(大丈夫です我が主、現在一日1-2時間行動できます)

(余裕だな・・・)

(やるか・・・)

「古より煌く 聖なる騎士 グラデイウス  
我に力を・・・」

「・・・それが聖なる騎士か」  
「ああ・・・いくぞ、シグナム」  
「烈火の将 剣の騎士シグナム・・・参る!」  
「煌きの聖騎士 グラデイウス・・・行く!」

ドンッ!

二人が同時に突っ込んだ もの凄い速さ

ガキイイイン!-!

「くつ!」

「その程度か?シグナム!」  
「うおおおおおお!-!」

ガキイイイン!

つばぜり合い・・・シグナムが負けているが  
見る限りに差は無いが・・・

「レヴァンティン!」

ガシャン!ガシャン!

「火竜一閃！」

「くつー！伸びる光の剣！」

「ド「オ———ン！—

「まだだー！紫電一閃！」

「パラディン・ブレイク！」

お互いの技と技のぶつかり合い  
少しでも気を緩めれば・・・終わる

「くつー！おおおおー！」

「降り注げー！聖なる剣達よー！メテオ・グラディウスー！」

無数の細い光の刃が雨のようにシグナムに襲い掛かる  
シグナムは、少しは当たるが・・・致命傷ほどの傷はなかった

「さすがシグナム・・・」

「はあ・・・はあ・・・くつ！」

「ここに集え・・・光よ・・・パラディンバスターーーー！」

「砲撃だと！？」

「ド「オ———ン！—

予想もしない砲撃にシグナムは回避出来ず・・・そのまま直撃  
焰真の勝利・・・

「終わった・・・フェイト・・・また今度な

「うん！」

（マスターお疲れ様です・・・）

（忙しいなマスターは！頑張れ！）

（ああ・・・）

こうして新たなる力を手に入れると同時に  
新たなる戦いに参加する焰真だった・・・

## 十一話 聖騎士の力（後書き）

焰真「更新遅くないか？」

作者「大丈夫！宿題は終わらせた！これから更新していきます！」

焰真「いろいろ」

作者「焰真君視点ばっかだなあ～他のキャラ口調が・・・」

焰真「乙」

作者「頑張ろう！～それでは！」

作者「皆様からの評価・感想待つてますm-m」

作者「駄文ですが・・・次回もよろしくです」

十二話 軍勢襲撃（前書き）

突然の襲撃

大量のガジェット・戦闘機人量産

六課ピンチ・・・

## 十二話 軍勢襲撃

「戦闘ばっか……疲れた」

「焰真！そつちは……頼むね」

「ああ……行くか」

もの凄い量のガジェットが襲つてきた……  
またしても……いきなり戦闘開始か……

「超電磁砲！」  
レールガン

電磁加速をつけたコインを飛ばすが……威力はあつても  
数は倒せないか……

「行くぞ！カオス瞬刀／風／」

（OKマスター！）

「天魔七閃！」

「スペアン……

その場で抜刀……何も無く見えるが刀を鞘に収めると……

「ドゴオ——ン——！」

「零閃／九閃……耐え切れるかな？ガジェットども……」

「瞬刀／風／」

カオスのモードの一つ

零閃／九閃 一つの閃で多数の技がある

基本は抜刀での戦闘が多い

「・・・風神一閃！」

ガジェットに耐え切る術は無く・・・次々大破していくガジェット達

しかし・・・

「戦闘機人か・・・今日は多いな」

「貴方を・・・殺す」

「いつも通りのセリフだな・・・新の力の試しだ」

（グラディウス？ いけるな）

（いけます・・・我が主）

「古より煌く 聖なる騎士 グラディウス  
我に力を・・・」

「それが・・・貴方の新能力ですか？・・・行きます」

「集え！光よ・・・パラディンバスターーーー！」

ドゴオーーーー

不意打ちだつただろうか？まああんなにも居るんだ・・・

「さすがに多いな・・・」

煙が晴れると、そこまで減つていないので一目で分かり全員やる気満々で武装していた戦闘機人達

「少し・・・無理をするかグラディウス解除・・・エデンー！」

（了解 SET UP）

「フリーダム・・・行け！ドラグーンウイング達！」

焰真が言つとドラグーンウイングが相手のほうに飛んでいき

「ドラグーンバースト！」

ドラグーンウイングの先から5つに分かれるエネルギー砲が発射され  
ガジェットと戦闘機人達にダメージを与える

「まだ居るか・・・ドラグーン・レイ！」

ウイングがこちらに展開され・・・雨のよつにエネルギー砲を擊つ技  
さすがにこれなら・・・！？

「・・・誰だ？お前は」

「貴様は倒す者だ・・・」

「そういうセリフは相手と自分の実力の差を見極めてから言え」

煙が晴れると一人の男が立っていた・・・

「我が名はガイン・・・貴様を倒す者だ」

「・・・話なら六課で聞くけど・・・」

「ふつ・・・炎烈爆破！」

「モード ソウルゲイン！」

ドーカー——ン！！

敵の鎌のデバイスから炎の弾が発射され、こちらに近づき爆発したが・・・

その場にいたのは・・・紅い目に蒼い装甲・・・ソウルゲイン接  
近戦型のロボだ

## 「青龍鱗！」

# 「烈火砲彈！」

青いエネルギー破と赤き炎の砲弾がぶつかり合うが  
青龍鱗のほうが上だつたのか砲弾は敗れソウルゲインの技がガイ  
ンに向かう

「くつ！火陣盾！」

## 「玄武剛彈！」

ソウルゲインの両手が回転し相手に向かつて飛んでいく  
相手の盾を破壊し・・・

「なつ！ぐあああああ！」  
「その程度か・・・終わらせる」

肘にある針のような物が伸びてソウルゲインが高速移動を始める

「・・・舞朱雀！でええええ！」

ズバーン！・・・・

「ガハア！・・・くそ」

「俺を倒すなら・・・もつと修行してこい」

ガインに勝利し・・・他の皆もガジェットを擊破し  
任務完了・・・・

（機動六課）焰真自室（

「ふう、疲れた・・・」

「お疲れ様、焰真」

「ああ・・・フェイトか・・お疲れ様」

仕事の終わりと同時にフェイトが入ってきた・・・

「はい、焰真、シャマルから・・・疲れも吹き飛ぶ栄養剤だつて・・・

「・・・嫌な予感しかしないんだけど・・・まあありがと」

疲れも吹き飛ぶ？栄養剤で？意味が分からん・・・  
焰真が飲んでみると・・・・

「・・・体が熱い・・意識が吹き飛ぶ?栄養剤か?これ  
「シャマルが・・焰真大丈夫?」

・・・やばいぞ・・・意識が、フェイトに突進しそう

「なあ~フェイト・・・少しだけ

「きやつ!?どうしたの焰真(／＼)」

焰真が我を忘れたのか・・・フェイトをベットに寝かせ抱き枕にしていた・・・

「仕事の褒美つてことで・・・」

「えつ焰真!?えええ・・・(／＼)」

「うう・・・ダメか?」

「はうう・・・(／＼)」

その後焰真は眠りにつき・・・1時間後に目を覚ました  
フェイトの顔は真っ赤で湯気が出るほどだった・・・

「m・・mすまん」  
「い、いいよ栄養剤のせいだし・・・」(＼) (＼) (＼)

シャマル・・・後で拷問の時間だ・・・

「なんてお詫びをすればいいか・・・」  
「んじゃ・・・今度私が抱き枕にしていい?」(＼)

・・・はあ？ フェイトも栄養剤飲んだのか？

「今なんて・・・抱き枕にしていい？ って言つた？」

「うん・・・（／＼／＼）」

・・・フェイト寝ぼけてる？ ・・・その様子は見られない  
マジで言つてるのか・・・嫌じゃないけど

「俺なんかでいいのか？ 本当に」

「うん！ ・・・焰真がいい（／＼／＼）」

こんな感じで変な約束をしてしまつた焰真  
いろいろと今後の行方が気になる焰真だつた・・・

## 十二話 軍勢襲撃（後書き）

作者「すんませんでした……」  
「… 分かってますな？」  
「… 命だけは… お許しをおおお…」  
「… とつとと逝けええええ…」  
「… ぎやああああ… それは置いといて」  
「… 置いとくなよ…」  
「… リリなの以外でも転生物やりたいなんて…」  
「… 同時進行つか？ お前には無理だ」  
「… 考えてみよ」  
「… ダメな作者だ…」  
「… まあ今はこっち頑張らないと… それでは…」  
「… 皆様からの評価・感想待つてます！」  
「… 駄文ですが… 次回もよろしくです」

## キャラクター紹介②（前書き）

キャラクター紹介その2です  
焰真とデバイス 騎士の力の紹介です

## キャラクター紹介②

（主人公）

神童焰真 17歳 184cm 58kg A型

機動六課 ライティング隊 フェイト補佐官

髪の毛の色 黄色 瞳の色 紅色

魔力変換資質 炎熱・電気・凍結

魔導師ランク EX以上

ミッド式 ベルカ式どちらでも無い変わった魔法使用可能  
ミッド式&ベルカ式も使用可能

バリアジャケット

黒い服に黒いズボンとにかく黒

FF8のスコール・レオンハートと同じ感じのデザイン

好きなもの 自然 武具 旨い料理 アニメや漫画

苦手なもの 計算 辞書 など

転生前と転生後で歳に変化無し

普段からはあまり人と話さず一人で居ることが多い

転生前に武術を少しやつていて運動神経は良い

頭も悪くは無い、デバイスは二つ持っている

煌きの騎士 グラディウスもいる

能力 「神技創造」自分想像した武器・技・魔法・召喚魔法使用可能

「幻想能力」転移・鍊金術・空間移動・など使用可能

「超変身」 想像した物や生命体に変身可能  
デバイスの真の力の解放可能 力オスとエデンのみ

力オス

神童焰真のデバイス 携帯時黒いピアス

人のような意思を持つていて（礼儀知らずな性格）  
多数の武器の変形可能である

黒刀「罪」

日本刀が黒くなつたような刀切れ味は良く名刀とも呼べる一振り

光剣「破」

光の大剣横にも少し長く光の剣を伸ばすことも可能

焰刀「断」

赤き刀身の双刀 刀身を触ると熱い

魔槍「滅」

黒い槍 見た目はドラゴンクエストのメタルキングの槍 いまだ出  
ていない

瞬刀「風」

薄い刀身で長さは、そこまで長くなく 短くも無い 零からまでの  
型がある

エデンと同じ焰真のデバイス敬語や礼儀知らずのデバイス

カートリッジの装填方法

無限発装填のリボルバータイプ

まだ登場していない カオスLV4 真力解放後 混沌神力オオスLV5

### エデン

神童焰真のデバイス 携帯時は白いブレスレット  
人のような意思を持つ（礼儀正しく優しいタイプ）  
モードがいくつある

#### モード ドラグーン

初期状態のモード一番よく使用されている  
二つの銃を持ち5枚のドラグーンウイングと言つなの羽のような物  
がある  
見た目はストライクフリーダムガンダムのような感じ

#### モード アルテマ

一撃の攻撃に力を使うモード

大きな3枚の天使の羽に砲撃用の銃

#### モード エデン

最強の状態 ドラグーンの見た目で両肩に砲撃用の砲台があり  
ミーティアのようなのも装備している

カオスと同じ焰真のデバイス 礼儀を心掛けている  
カートリッジの装填方法

無限式オートマティックのマガジンタイプ

まだ登場していない エデンLV4真力解放後 神楽園エデンLV5

### ヴァルキリー

神童焰真のデバイス カオスとエデンの合体一つ目のロミッター  
金色に少し白い筋のある鎧に金色のマント

ヴァルキリー・リミッターがある LV4 LV5

武器はヴァルキリー・ソード 接近戦・長距離戦どちらも得意

合体リミッター

ヴァルキリー・オーディン・ファイナル

オーディンとファイナルは、まだ謎

### グラディウス

神童焰真の手に入れた騎士の力、普段は指輪の姿をしている

「煌く聖なる騎士」の名をもつ騎士で

武器は 聖光剣グラディウス 光で出来ている剣 伸ばしたりも出来る

盾 白銀の盾 鏡のような盾で一定以下の威力の技なら反射できる  
変身時の掛け声は

「古より煌く 聖なる騎士 グラディウス  
我に力を・・・」である

騎士の中でも上位の能力の騎士

## キャラクター紹介②（後書き）

作者「キャラ紹介2でした」

焰真「強いな・・・けつこう」

作者「アクセス（PV）は335000！？だったつけ？ですW

焰真「覚えろよ・・・」

作者「ありがとうございます」

焰真「この調子で頑張れ・・・」

作者「それでは・・・」

作者「皆様からの評価・感想待つてます！」

作者「駄文ですが・・・次回もよろしくです」

## 十四話 究極焰炎（前書き）

焰真は新たな勢力との決戦に向けて  
頑張つて修行中

## 十四話 究極焰炎

「行くぞ！焰真！」

「来い！シグナム！」

現在シグナムと練習中・・・勝つまで戦うって・・・無理言わないでシグナム・・・

「紫電一閃！」

「秘剣・・・燕返し！」

スパパパアン・・・

「力ハア！くつ！はああああ

「天の鎖よ！」

頑丈な鎖で動きを封じ・・・

「約束された勝利の剣！」

強大な一撃！！

「ドゴオ――――ン！！

「ふう～疲れた・・・」

シグナムは・・・氣絶か、やりすぎたかな？  
これで諦めてくれるといいけど・・・な

「お疲れ様、焰真君」

「ああ・・・なのは、そつちばどりだ?」

「「」」の調子も「」」感じだよ」

騎士達と遭遇も考えられる・・・  
なのは達も戦闘するかもしれない・・・強くなつてもらわないと  
な・・・

「焰真さんー」

「ん?どうした?エリオ」

「焰真さんに必殺技つてあるんですか?」

( ( ( . . . . . ) ) ) 焰真・カオス・エデン

必殺技・・・考えたことも無かつた・・・

(カオスとエデン・・・あるか?)

(マスターが考えればありますよ)

「焰真さんーあるなら、ぜひー見せてくださいー」

「んまあ・・・やつてみるか」

「焰真君の必殺技・・・あの十字架?」

「ああー違つと思つ・・・」

「ひして・・・」

「必殺技か……しかも、こんな広い場所つて……期待しちゃ  
だろ」

「焰真さん！頑張つてください」

（けつこう魔力消費するかもしれん）

（了解マスター）

（ヴァルキリーのほうでやる）

「なのは達危ないから離れててくれ……  
「ほ～そこまでの技か」

シグナム・・・プレッシャー考え方つよ・・・

「まあやるさ・・・たぶん・・・熱いぞ」

「炎の必殺技つてことですか？」

「ああ・・・」

「ヴァルキリー！行くぞ！」

焰真はヴァルキリーをSETヒュさせ

「究極の炎 すべてを滅する 無の火炎  
天をも焦がす 幻想の焰！」

「アルティメットア  
究極焰炎！！」

「ドゴオ――――――！」

「 」 「 」 「 」 「 」 「 」 「 」 「 」 「 」 「 」 「 」 「 」 「 」 「 」 「 」 「 」 「 」 「 」

田の前は何も無かつたかのよつたなクレーター  
地面は燃えている・・・

「ふう、疲れた・・・」

「また焰真との差が開いたね・・・練習頑張りうつ」

・・・こじて必殺技お披露田会は終了した・・・

（数日後）

「焰真、手紙だよ」

「ありがと、フェイト・・・手紙か」

「うん、仕事だから・・・後でね」

「ああ・・・」

手紙・・・珍しいな・・・

内容は・・・

神童焰真殿へ

貴方を、この世で実力トップ7位以内の実力があると言つります

七騎士の称号を「えます・・・異名のようないふは・・・

「聖なる断罪者 幻想の王」です

後日、七騎士で会議がありますので・・・

よろしくお願いします、ランクは現在2位です

「かつこいにな・・・本氣出せば1位だな・・・たぶん

（決められましたが・・・いいのでか？）  
（まあいいだろ・・・）

「七騎士か・・・面白そつだな・・・」

七騎士の称号を手にし・・・たゞに謎が深まる  
この世界・・・どうなるのか？

## 十四話 究極焰炎（後書き）

作者「・・・・m - - m」

焰真「遅かつたな・・・」

作者「すいません><」

焰真「怒るのも疲れた・・・」

作者「頑張ります・・・wそれでは！」

作者「皆様からの評価・感想待ってます！m - - m」

作者「駄文ですが・・・次回もよろしくです」

## 七騎士と今後（前書き）

すいません、  
突然成り行きで出した…  
七騎士の紹介です

## 七騎士と今後

七騎士とは・・・  
この世の頂点に立つ七人、國のあらゆる元を決めたり、惡を切り裂く騎士でもある

戦闘能力ランキングがあり 七騎士の中でも順位があり1位が一番偉い  
実力・・・実力のある者こそが正義の世界・・・

### （七騎士紹介）

現在1位 「最強を求める旅人 天地覇者」 グランツ・ディード  
男

七騎士だが、会議にも参加せず旅を続ける者190ほどある身長  
で見た目は長い金髪に赤い瞳  
戦闘時以外は自由気まま流れに身を任せた性格だが戦闘時には  
鬼神の如く強さを發揮する 現在も最強を求めて旅をしている

現在2位 「聖なる断罪者 幻想の王」 神童焰真 男

新たに七騎士になつた者 機動六課で働いており、その素晴らしい  
戦闘力は

今は旅に出て不在の1位以上とも言われる、無限に思える技の数  
底知れない実力を持つている 機動六課と七騎士の仕事をどうす  
るか考え中

現在3位 「凍てつく神剣 冷血の騎士」 グリフアス・ルーツ

冷静な思考、とある王国の騎士団長で、その凍てついた剣は大気を凍ると評判

神のご加護を信じ、策を考えるのが得意、七騎士の中でも仕事熱心なほう

少し長い青色の髪の毛に青い瞳

現在4位 「天を射抜く銃 天の女神」 女 ランベスター・ルリ

まだ16歳にして七騎士になった才女 容姿端麗頭脳明晰とも言われる

白に少し黄色を入れたような髪の色 仕事熱心で頑張っている天をも射抜くと言われる攻撃は、見えない場所から撃つても当たると言われている

現在5位 「大地を斬り裂く者 一刀無双」 男 村雨戦国

戦国武将かのような口調、礼儀を大事にし、いつでも全力勝負な男  
髪の毛は長くボーネ？みたいな感じ その一本の刀の攻撃は 天  
を斬り大地を裂くと名高い

魔法は使用出きないが、魔法かのような剣技で敵を翻弄する

現在6位 「絶望の魔女 禁断の追求者」 女 クレーナ・オルム

魔法の全てを追求し七騎士になるほどの実力までたどり着いた者  
茶色の長い髪の毛 日々、研究や魔法の実験をしている、実験デ

バイスを数多く持つ

焰真の技に興味津々な魔女

現在7位 「財力の王 金を求める者」 男 デイズ・バビロム

金こそ力なりと・・武器やデバイスを買い取り様々な兵器開発によつて七騎士になつた男

戦艦、要塞、なんでもありのようで七騎士会議のある要塞の彼の

私物

すべて金で解決できると思つてゐる

～今後の内容～

七騎士になつた焰真、六課と離れることになり・・・七騎士の仕事を頑張る焰真

ある事件が元で、六課と七騎士は戦うことになつてしまつ・・・突然の七騎士任命に六課との対立・・・今後どうなるのでしょうか・・・

## 七騎士と今後（後書き）

作者「勢いでやつてみた七騎士の少しの説明と今後についてです」

焰真「忙しいな・・・俺」

作者「まあ頑張つてくださいなw」

焰真「お前のが頑張れよ・・・」

作者「あい・・・それでは!」

作者「皆様からの評価・感想待つてます! m - m」

作者「駄文ですが・・・次回もよろしくです」

## 十五話 七騎士と事件（前書き）

七騎士になつて一ヶ月仕事にも慣れ  
他の七騎士とも仲良くなり・・・六課から離れて一ヶ月にもなる  
少しでも六課の仕事を減らそうと頑張るが・・・無理だった  
そして・・・事件が・・・

## 十五話 七騎士と事件

「ふむ・・・会議はメンドイな」  
「焰真さんが、そんなこと言つてどうするんですかー今この中で一番偉いのに・・・」

ランベスター・ルリ・・・この中で一番仕事熱心でいろいろ教えてくれる才女だ  
まだ若いのに・・・この中では、よく話すほう

「グランツが不在だからの・・・お主が頑張らねば」  
「まあ・・・そうだな」

村雨戦国・・・戦友で一番仲が良いかな？練習はよくする  
まるで昔の人みたいで魔法をよく知らないけど・・・強い

「今日は・・・何を話すのでしょうか？」

「えっと・・・ロストロギアや、なんか色々だ」

グリファス・ルーツ・・・冷血とも呼ばれ頭脳、戦闘能力ともに  
高く

話せば分かるタイプかな？

「まあ機動・・・六課？だつて？あそこが働いてるし・・・大丈夫  
じゃない？」

「いっつも頑張らないとだぞ・・・」

クレーナ・オルム・・・俺の使つ技に興味津々の魔女  
研究に明け暮れている・・・

「はませ～ワシジリの中で働くのも少ないがの  
「まあ・・・違つとは言えませんがね」

「デイズ・バビロム・・・金の王とも言われる・・・兵器開発ばかり  
まあ色々と奢つてもひらつてゐるナビ・・・・

「まあ今田も終わりと・・・ルリ、調べ番だつたつけ?行くか  
「はこーお手伝い、ありがとひざやこます!」

何やうり調べものがあるやうなので・・・手伝ひ」と

「いや～仕事熱心だな・・・偉いもんだ  
「そ、そんなこと・・・焰真さんだつて

「俺が来る前は、ほとんど一人で頑張つていたらしい  
グリフアスもやつっていたようだけど・・・

「でもルリのサポートがいるだろ?ありがとな・・・

頭を撫でてみる・・・

「はう～は、はい(／＼)」

なかなか・・・可愛いリアクションだ・・・フロイト以上かもし  
れん・・・  
おつと一調べもの・・・

「ん？この本じゃないか？」

「ちちが！焰真さん！ありがとうございますー。」

さて・・・この次は戦国と模擬戦だったかな・・・

「んじや戦国んとこ行つて来るね・・・んじや」

「ありがとうございました！」

「いつも、すまぬな・・・付き合わせて」

「俺も好きでやつてるし・・・いい練習になるからな」

「ふつ・・・不器用がゆえ・・・手加減出来ぬぞ？」

「俺のセリフだ・・・黒刀へ罪へ」

戦国は魔法は空飛ぶと刀に魔力を纏わせるぐらいしか出きないが・

・・  
すつじく強い・・・

「參るぞ！おおおおお」

「行ぐぞ！断罪！」

ガキイイイイ！

「うむ！ 桜・一刀斬破！」

「くつ！ 破罪！」

ドゴオ――――ン！

「さすがだな・・・瞬刀・風・幻想一閃！」

「うぬ！ 豪破・・・抜刀！」

スペアン・・・・・

・・・・・ゴゴオ――――ン！！

地面は地割れのように割れ・・・もの凄い衝撃波が生じる

「さすが戦国だな・・・」

「お主こそ・・・だが！ 桜・天風大蛇！」

「霸王九閃！」

スゴオ――――ン！！

「霸王九閃とぶつかり合つて壊れないなんて・・・さすがの刀だな」  
「雨之村雲は我が友・・・壊れはせぬ」

戦国唯一の武器・・・刀一本だが・・・とんでもない実力者

「見せよう！ 我が戦友よ！」の一撃・・・しかと受け取れ！」  
「じゅ

「受けてやろう・・・俺の一撃で・・・」

「行くぞ！ 大地両断之太刀！ でええええ！」

「天空零閃！」

お互いが抜刀・・・そして

ドゴオ――――――ン――

俺の後ろのほうにあつた山は真つ二つに・・・地面は一直線に割れ  
大地が二つに別れたかのよう・・・

「今日の抜刀勝負は・・・拙者の勝ちでござるな」

「チツ・・・今日だけだけどな・・・」

天空零閃の斬撃は弾かれたのか・・・さすが戦国だな

「んじや帰るか・・・」

「承知・・・・」

「お二人とも！大変です！」

何事？と振り返ると・・・ルリが走ってきた・・・

「どうなさつた？ルリ殿」

「何事だ？そんな焦つて・・・」

「機動六課が聖王のなんちやらつてのを保護してゐる感じみたいで我々七騎士で保護しますと

言いに言つたら即答で断られました・・・グランジさんに連絡入れたら・・・

何やら戦争だ・・・逆らつた奴は殺す！だそうです・・・

戦争？六課と？ヴィヴィオを争奪のため？意味が分からん・・・  
反対は出来んな

どうするか・・・ヴィヴィオを保護して返すのか？それでいいか・  
・

「拙者にて反論せりがりん・・・・即答で断るとせ・・・舐められたものだな」

「お、俺もいいかな・・・・戦争はあれだけど・・・」

「グランツさんが再度忠告にいったら・・・冷静な感じで即答されたのでお怒り中です・・・」

「それで潰すか・・・短気すぎるだろ・・・」

俺がヴィヴィオをすぐ保護して終わらせるか・・・六課の面々を倒すわけいかない

「ハオウを起動させて全力で潰すだそです・・・」

「ぶつ！ハオウだつて？あの巨大戦艦をか！？バカだろ・・・」

「明日に行くそなので・・・・久しぶりの戦闘です！」

「喜ぶとこじやないだろ・・・」

早めに終わらせるか・・・

ひつして・・・七騎士VS機動六課になってしまった・・・

グラントが説得に来た六課の隊員を説得される前に殺し・・・六課に見せつけると

六課の皆も戦つ気になってしまったよつだ・・・・ひつちが悪いだろ・・・

早めに終わらせないと……大変なことになってしまつ  
現在起動中の戦艦ハオウの砲台の上に座つてゐる……

「舐められた者だな、俺達も実力の世界なのによー。」

「グラント怒るな……殺すなよ」

「焰真さんの言ひとおりです！『絶で終わりです！』

「なのは達が死んだら……終わりだ

原作あーだこーだの話じゃなくなる……

「七騎士の力を世界に見せつければ……今後楽になるんじやない  
？」

「神の『』加護がある限り……負けは無いです

「はつははは！ハオウの力見せてくれるわ！」

「拙者は無駄な殺生なしないでござる……戦いを楽しむのみ」

皆やる気満々かよ！氣絶つて言ひてゐし……ヴィヴィオの場所

は？わからん……

速く終わつてくれ！

「んじや……てめえーら！俺の獲物横取りすんなよー。」

「俺は……ハオウを守るか……」

「バビロムと焰真さん以外は出陣ですね！頑張りましょー。」

・・・・・「つして七騎士VS機動六課の戦いは……始まる

## 十五話 七騎士と事件（後書き）

焰真「どうなつてんだよー！」

作者「…………勢いで…………すいませんへへ

焰真「…………」

作者「前しか見てません」

焰真「霸王…………」

作者「まつてまつて！死にたくないよＴｏＴ」

焰真「リリカルなのはじやないよな…………ほとんど」

作者「だ、大丈夫！…………かも」

焰真「はあ～ダメな作者はやっぱ駄文のみか…………」

作者「頑張ります～それでは！」

作者「皆様からの評価・感想待つてます！m・・m

作者「駄文ですが……次回もよろしくです m・・m

## 十六話 天空両断之太刀（前書き）

七騎士で仕事している間に・・・原作終了してしまい・・・  
新たなる物語・・・七騎士VS新・機動六課  
今・・・始まる

## 十六話 天空両断之太刀

「俺の居ない間に終わったのか……早いな」

七騎士VS六課、俺はハオウの守備をしている……  
バビロムと俺以外は行ってしまった……怪我しなきや～いけどな

俺の知らない物語……楽しむか

「お主ら……敵か？拙者七騎士の戦国と申す」

「エリオ君……遭遇しちゃつたね……」

「このような子供が？拙者の相手だと……舐められたものだ  
しかし……この二人……なかなかだな……」

「ヴィヴィオは渡せません！行きます！」

「うむ……拙者不器用がゆえ……手加減せぬ！」

「実力の差・・・見せつけよ！」

「行きますー！」

エリオは突進していく・・・フリードはすでに大きくなつてあり  
空を飛んでいる

戦国は抜刀の構えをして・・・

「うぬ！ 桜・天風大蛇！」

刀を抜き一回天すると戦国の周囲に竜巻が現れて・・・

「くつ！ 紫電一閃！」

「ふつ！ その程度じゃ、敗れぬぞ！」

「フリード！」

フリードは炎を放つが・・・桜・天風大蛇は破れず・・・  
押されていくばかり・・・

「ふむ！ その歳では・・・なかなかの腕前だが・・・拙者には勝て  
ん！」

「くつ！ うわあああ！」

弾き返されて・・・エリオが体勢を崩してしまつ

「エリオ君！ 竜巻が！」つちにもー？ きやあああー！

「油断大敵で！」ざるぞ・・・乱桜舞！」

戦国は刀に魔力を纏わせ舞うように刀を振ると斬撃が予測不能・

・いろんな場所に飛んでくる

「一つ一つ威力が高く……

「くつ・・・・・はあ・・・はあ・・・強い」

「実力の差と言つものだ・・・だが手加減はせぬぞ」

「フリード！」

「甘い・極両断破！」

刹那の抜刀から放たれた斬撃にフリードは回避出来ず・・・落ちていく

「くそつ・・・おおおおおお」

「我を忘れるとは・・・甘いな・・・ふん！」

ガキイイイイン！

「くつ！何故ですか？ヴィヴィオを！せつかく取り戻したのに！」

「拙者は、その子に興味は無い・・・戦いにきたのだ！ぬん！」

「かはあ！・・・・・」

戦国の攻撃に耐え切れず一撃受けてしまつフリオ

「桜・一刀斬破！」

「きやあああああ！」

キヤロは防御するも・・・耐え切れず、その場に倒れてしまつ

「キヤロ・くそおおお！」

「拙者と出合つたのが運の刃きじやつたな・・・」

両者は一寸離れ・・・

「最後にじよつ・・・お主に耐え切れるかな?」

「はあ・・・はあ・・・」

「天空両断之太刀! はああああ!」

「スパン・・・

「ドゴオーーーーー!」

「えつ?・・・かはあ!」

一瞬の抜刀・・・刀が抜かれ戦国が後ろを向くと同時に  
エリオは右肩から左太ももまで一直線に斬られていた・・・深く  
は無い

「拙者の勝ちで!」やる・・・今回はな

「くつ・・・・・」

エリオは力尽き・・・キャラも絶していて・・・戦国の勝利と  
なった

「今の子供は!」まで・・・拙者も頑張らねば

と全ての子供が強いと世間知らずが思い込みするのであった・・・

・ グランツはヴィヴィオには興味が無く・・・戦うだけで終わらせる  
だそうだ・・・

「!」の子達は・・・グランツの怒りを静めるために・・・か

「ハオウ砲台上」

「まさか……フヨイトが来るなんてな……」

「焰真……なんで? こんな戦いするの?」

一番戦いたくない人と戦うのか……

「七騎士の言つことには従おつぜ……一応偉いんだからさ」「ヴィヴィオは渡せない……取替えしたばつかなんだから」

原作の最後か……そりやーなるわな……よく分からぬ組織に

渡すなんて

七騎士目立たないし……個人個人自由すぎて

「実力の世界だ……一位に従つてゐるだけさ……たぶんヴィヴィオを保護する気は無いぞ」

「なら! なんで!」

「簡単だ……戦うためさ……」

「変わったね……焰真」

え？俺が戦いたいみたいな感じになつてませんか？

・・・まあいいか

「さ～て久しぶりのフェイトとの戦い・・・七騎士、神童焰真負け  
るわけにはいかん」

「・・・私だつて・・・負けないよ！焰真！」

「戦いたいんだけどな・・・」

「どうしたの？焰真？降参するの？」

・・・・・けつこうなあ～めんどくさいって言つつか

俺の戦う理由が不明なんだが・・・

「なあ～フェイト皆に伝えといってくれ・・・また戻るつてな

「え？戻つてくるの！？」

「七騎士はやめないが・・・一時戻る予定だ・・・今はすぐに終

わらせる

「負けないよ・・・」

六課には一旦戻る予定だ・・・そのつちな

「一撃で決めるぞ！～乖離剣工ア・・・」

無銘にして最強の剣。ニアという名前はギルガメッシュがつけた  
もので、彼の持つ究極の切り札。剣というより円柱状の刀身を持つ  
突撃槍のような形状

「天地乖離す開闢の星！」  
・エヌマ  
・エリシウ

かつて混沌とした世界から天地を分けた究極の一撃。彼が「乖離  
剣工ア」と呼ぶ、無銘にして究極の剣から放たれる空間切断。風の

断層は擬似的な時空断層までも生み出す

ドゴオ———ン！

「フハイト……既によししくな……」

七騎士VS六課……グラントの短気な性格が招く最悪の戦い……  
どうなるのだろうか……  
六課に戻る焰間 七騎士の仕事も同時に……出来るのだろうか  
次回は戦闘終了後……六課からの始まり

## 十六話 天空両断之太刀（後書き）

焰真「最低な展開だな・・・」

作者「・・・自分でも分からなくなってきたw」

焰真「天地乖離す開闢の星！」

作者「やめてええええ！」

焰真「どうしようもないダメ人間だ・・・」

作者「すいません><・・・それでは！」

作者「皆様からの評価・感想待ってます！m-m」

作者「駄文ですが・・・次回もよろしくです」

第一章 第零話 新たなる物語（前書き）

七騎士VS六課と戦いから・・・一ヶ月後の物語

機動六課VS七騎士の戦いから・・・一ヶ月

七騎士の一人、神童焰真は六課解散後フェイト・T・ハラオウンの補佐官の仕事へ

七騎士の仕事もこなしながら補佐官をして居る畠真六課解散後、皆をも会う機会が無く・・・・・

今現在モアサイドと破壊できなかつたがシヨウト達と戦闘中

「チツードラグーンキヤノン！」

ドラグーンモード中、一つの銃から放たれる巨大なエネルギーの塊

瞬刀風霸九閃！」

ドゴオーニン！

(焰真！そつちはどう？)  
(まあまあだ・・・)

ガジェットの数は多くないが・・・何故か前より強くなっている  
何故だ?

「風神一閃！！」

風の斬撃を飛ばして・・・最後だな

「全滅かな……終わりか」

ガジエットは全滅、フロイドのほうも終わったようすで……

「焰真～お疲れ様」

「ああ……そっちこそ、お疲れ様」

なんとなく頭を撫でてみると……

「えへへ～（／＼）」

いつも通りの反応だな……19歳なのか？

「さて……帰るか

「うん」

「なあ・・・フロイドやつは部屋を別にしてもらおう」

「え～決まったことだからね・・・それに、『アーリア』（――）

「

何故か同じ部屋なんだよな・・・違つ！ 作者に言え！ 僕に石を投げるなつ！

・・・仕事も多いせいが、寮みたいな感じになつてゐる・・・

「寝るか・・・」

「おやすみなさい」

新たなる物語・・・焰真達に受け受けられる・・・新たなる敵  
焰真達は乗り越えることが出来るだらつか・・・

## 第一章 第零話 新たなる物語（後書き）

作者「m - - m」

焰真「急展開にも程があるだろ・・・」

作者「短い + 更新遅くて申し訳ない・・・」

焰真「現実逃避の受験生が・・・」

作者「えへつ」

焰真「・・・・・」

作者「そ、それでは！」

作者「皆様からの評価・感想待つてます！m - - m」

作者「駄文ですが・・・次回もよろしくです」

## 第一章 第一話 騎士戦争（前書き）

更新遅れましたvv宿題やら受験勉強やら。。。orz

騎士の力を持つて いる焰真  
その力が手にした以上。。。騎士戦争からは。。。逃れられない運  
命

## 第一章 第一話 騎士戦争

「機動六課が！？・・・ってことあ皆とか？」

「うん、また皆といつしょに仕事出来るね」

・・・忙しくなりそうだな・・・仕事増えるのか

「最近騎士達の襲撃が多いな・・・」

「そうだね・・・」

六課解散後、騎士達の襲撃が多い

今のところ、もの凄く強い奴が居ないかつたが、平均的に騎士は  
強い

（我が主、反応あります・・・騎士です）  
(はあ・・・行くか)

「フェイト・・・騎士だ行つて来る」

「一人で大丈夫？」

「ああ・・・」

ほとんど一人で騎士との戦闘を行つている焰真  
騎士との戦闘は騎士の力で行つたほうが楽だからだ・・・

「・・・あれだよな・・・たぶん」

200㍍ぐらい先で飛んでいる、赤い大きな鎧で斧を持っている

騎士

何もせざ「王立ちしてる・・・バカか?」

「古より煌く 聖なる騎士 グラディウス

我に力を・・・」

騎士に変身して・・・いざー

「集え! 剣よ! グラディウスアーツ!」

不意に12本の剣を飛ばしてみる・・・が

「甘いはあ! 火炎撃落!」

炎を纏つた斧を振りおろして・・・剣を破壊した・・・

「さすがに終わらないか・・・」

「貴様が噂の騎士か! この俺が倒してやる! はははー・

(熱血キャラ苦手です・・・)

(マスターめんどくさいの嫌い)

(我が主・・・死亡「フラグ」出してるので・・・終わらせましょ

(お前ら・・・相手が可哀想だろ)

「火炎撃落！ぬおおおおお！」

「煌光聖破斬！」

「！？ぬわああああ！」

「ド」「オ――――ン！」

「・・・・・雑魚キャラだったのか！？」

（熱血キャラ・・・乙）です

（マスター帰ろうよ）

（・・・時間の無駄でしたね・・・我が主）

「リボーン  
復活！――！」

（（（（なに！？））））

復活した赤い鎧の大男は・・・髪の毛が燃えている？何か違うよ

うな気がするが・・・

・・・冷静キャラに・・・

「行くぜええええ――！」

・・・なつてなかつたか

「煌け！我が剣よ！天をも斬り裂く！光の剣！」

「火王爆落撃！」

「エターナルバラディン・ノヴァ煌く騎士の天光！」

剣から伸びる巨大な光の剣で相手を斬り裂く・・・

「バカなああああああああああ！」

（熱血雑魚キヤラ乙です・・・）

（マスターなんか疲れたよ）

（我が家主・・・疲れました）

皆酷くない！？・・・敵さん頑張ってたのに・・・

「帰るか・・・」

無駄に力を使つてしまつたので・・・家に帰つて寝ることにした

「ふう〜疲れた・・・明日は休みだつたかな」

（残念ですが・・・七騎士の会議があります。）

（・・・休みが最近少ないな・・・）

「・・・寝るか」

騎士達の襲撃・・・騎士戦争の始まり・・・機動六課の再始動  
いろいろあつた一日だった・・・

## 第一章 第一話 騎士戦争（後書き）

焰真「逝つてらつしゃい！」

作者「更新遅れた+短くてすいませんでしたあああ！」

焰真「現実逃避の受験生があああ！何してたんだ！」

作者「新しい小説とか・・・考えてた」

焰真「・・・」

作者「・・・てへつ」

焰真「・・・ダメ人間すぎて・・・言葉を失うよ」

作者「えつへん」

焰真「逝つてらつしゃいへへ」

作者「やめてえええええ！」

作者「恐ろしい主人公だ・・・それでは！」

作者「更新遅れて、申し訳ありませんでしたm・m

作者「皆様の評価・感想など待つてますm・m」

作者「駄文すぎで困りますが・・・次回もよろしくです」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3142m/>

---

魔法少女リリカルなのはStrikerS ~煌きの幻想~

2010年10月13日15時47分発行